
楽園～私の居場所～

宝玉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

楽園（私の居場所）

【Zコード】

Z9960C

【作者名】

宝玉

【あらすじ】

友達ができるない、如月セト。そのわけは、親の都合による転校だった。しかし、ある学園に来てからというもの、彼女の人生が変わった・・・。微妙にファンタジーです。展開が早いかもですが、徐々に直したいと思います。しばらく更新停滞します。復帰未定

プロローグ 葉巻学園

「リリが私の新しい学校、ですよね？」

とある学園にのんびりとした女の子が転校してきた。彼女の名は如月セト。そののんびりした性格のわりには、わりとしっかりした名前だった。

リリは、葉巻学園。にぎやかで、あきない学園として有名だった。セトは、両親の仕事の都合でこの学園にくることになった。これまで何度も転校をくりかえし、友達が全くと言つてもいいほどできなかつた。

今度は友達ができるかと、楽しみにしていた。

「……中に入つても、よろしいんですかね？」

セトは一人でぶつぶつこいながらもさすがに靴を脱ぎ、じんじん中へと入つていった。

靴箱を抜けると、そこは真っ白に染まつた廊下。

広々としていた。ほかの教室も賑やかだつたが、近くの教室からはもつとにぎやかな声が聞こえてきた。5年生の教室からようだつた。セトの入るクラスだ。セトは歩いて5年生の教室の前まで近づいた。

「よし、みんな、新しい友達だぞ！」

先生がちらつとこっちを見た。セトは緊張して、足が震えていた。

「えーっ、だれだらつ？」

「はいってこい、如月！」

「はいー……」

セトはゆっくり教室に入つていった。そして中央のところまでくると、ぴたりととまって正面を見た。きれいなその、紫色の瞳で

クラスのみんなを見つめた。

「えへっど、如月セトです。転校、転校の繰り返しで、友達があまりできなかつたんです。この学園には少し長くいられるとおもうんで、その間だけ、ここで、仲良くなれたださーー」

セトは、今までより少し早い口調で話した。だが、とても緊張していた。みんなと友達になれるかが心配で、心配でたまらなかつた。みんながセトを不思議そうな目でみていくのだった。

「よろしくしてやつてくれ。如月に質問は？」
「はいはーい、質問じゃねえんだが、言つぜ。緊張しなくたつていぜー 別にいじめたりしねえよー！」
「やうだよー これからよろしくねー！」

とたんに教室中が拍手と歓声に包まれた。セトは真っ赤になつてうつむいた。しかし、その顔は笑つていた。今までに見せたことのないようなにこにこした笑いだった。

「あつがとうー！ 私はゆづきつづいてこれないかもだけど、ようしくお願ひしますーー」

セトの楽しい学校生活は今、幕を開けた。

第1話 友

「如月…… わんだよね？」

「ん？ あ、えっと……」

「あ、ごめんごめん。あたし、音羽ひのり！ よろしくね！」

セトは突然顔を突き出してきたひのりに驚いていた。ひのりは黒く長い髪をポニーtailに縛つて、赤いカーディガンを羽織っていた。なんとも存在感が強いイメージがした。

「ほんにちは、わたしは飛鳥ルナ。こいつは馬鹿だから気にしないでいいぞ」

ルナと名乗る少女が、ひのりを指差した。

「なんでなのぉー。セトちゃん、ルナだつて気にしなくていいよー。」

「わたしは本当のことと言つたまでだが？」

ルナはあくまでも言い返す。

「くつそー……」

「はいはい、けんかはお止め。私は青菜るい。」人のたちはドタバタコソビツて言われるほどの仲なのよ。うふふ、よろしくね

ひのりとルナはドタバタコソビツるにはお姉さんの存在、なのだろう、セトから見ると。そのうち、ひのりが口を開いた。

「あ、如月さんっ！ セトってよんでも良い？」

「はー！ もちろんです！」

セトは、待つてました！ と言わんばかりに、田を輝かせた。

「じゃあ、セト。あんた、いい所に此処に来たね！ あした、宿泊体験学習なんだよー！」

「ああ、そうだつたな。よかつたら、いつしょに班をつくらないか
？」

「うん、いいわね！ セトちゃんもいつしょがいいわ

セトは嬉しかった。友達が一人もできなかつた自分が、1日目で
こんなにも友達ができるなんて思つてもいなかつた。しかも明日の
宿泊体験の班に入れてもらえるのだ。こんなに嬉しいことなんて、
無い。

「あ、あ、その……」

「ん？」

3人は声をそろえて言つた。セトが恥ずかしそうに下を向いて言
つた。

「あ、ありがとうございます……」

「だつて、あたしたちは友達だよ！」

「そうだな、友達だ、セトは」

「む！ あたしのセリフ、真似したなー！」

ひのりは頬を膨らませた。

「貴様が私の言いたいことを先に言つたんだろうがー！」

ルナも負けじと言い返す。その光景を見て、セトは、友達つてい
いなあと思い始めた。るいはいつものことだと思い、笑いながらた
め息をついた。

第2話 田覚め編 全ての始まり

今日は待ちに待つ宿泊体験学習。セト、ひのり、るい……誰もが待ち望んでいた。

たつた一人を除いては。

ルナは布団の中にいつまでもぐらぐらしていた。そして、二つぶやいた。

「うわ、行きたくねえ。でも、ひのりとかは困るよな。私が班長だからな・・・」

ルナはどうしても行きたくない理由があった。元にいた学校の人がくるからだ。ルナの前の学校の人は、ルナをいじめていた。理由は、「人生、楽しみたい」からだそうだ。そんな話になり、偶然とおりかかったルナをいじめることになった。

毎日、殴られたり蹴られたりの繰り返し。時々、トイレの水をかけられたり。

そんな人生が嫌になつたルナは1年前に葉巻学園に引っ越ししてきた。葉巻学園の人たちの間ではいじめなどはなかつた。もちろん、ルナに優しく接してくれた。葉巻学園は寮式なので、ルナの部屋でも一緒に寝てくれた。夕食も一緒に食べててくれた。

そこで出会つたのはひのりだつた。ひのりはルナに初めて話し掛けってきた少女だつた。何にも疑わず、まっすぐな紅い瞳で、ただまつすぐ見つめていた。そのあと、話がだんだん弾むようになつてきて、今ではいいコンビだ。

たまにけんかもしたりしたが、そのけんかは早く収まった。るいのおかげだつた。

「わたしは……みんなに迷惑をかけてばかりで、何にも役に立たないで……」

「ピーン　ポーン！」

「ルナー、学校行こうよー！」

玄関のドアががちゃりと開いたすぐ後、ひのりの声がした。ルナは布団をかぶつて玄関へ向かつた。

「なんで貴様がここにいる！」

「なんでつて、迎えにきたんだよ！ 行くよ

「ああ、先にいっててくれ！」

ルナの格好を見たひのりは、小さく笑つた。

「ふふつ。待つてるよ」

「私は……行かない」

ルナはうつむいた。

「何で？」

「前の学校の人……」

「前の学校？」

「私をいじめてきた学校の奴らが来るんだよ……！」

「そんなのはあ、あたしたちが何とかするよー 行こう、ね！」

「ひのり……先に行つていろ！ 私は、まだしたくをしていない

「……うん、わかつた」

ルナは宿泊の準備をしていなかつたのだ。

ひのりにまで迷惑をかけられないと思つたルナは、ひのりを先にいかせた。いくら学園の別寮に泊まるところがあつても、時間的にギリギリだつた。

果たして、ルナは間に合うのか！？

第3話 特殊能力

7時20分。出発の時間になつてもルナは来なかつた。

「ルナちゃん、来ないわね……」

るいがぱつりと呟いた。

「うん、さつき立ち寄つたんだけど、したくをしてないみたいで……あたし、ルナを見てくる！」先生に言つといて、るい！

ひのりは寮のほうに走り出やつとした。しかし、るいに止められた。

「まちなさい、もうすぐ行くのよ！」

「嫌だよー。るいは、ルナがいなくたつていいの！？」

その言葉に、どつにも言ひ返せなかつたるいは、ひのりを寮のほうに行かせた。

「…………わかつたわ。早く来なさいね！」

ひのりは頷きながら、いそいで寮のほうに戻つた。

「ああ、おわんねえよ、したく」

ルナは、まだしたくが終わつていなかつた。半分ぐらいまでかばんに詰め込んだがそれ以上はもう覚えていない。何しろ行かないつもりだつたから、持ち物の一覧表を捨ててしまつた。だから、覚えている程度のものしか詰めていない。

「う…………くそつ…………行きたくなえ」

「ルナー！」

声とともに玄関のドアが開いた。ひのりが中に入つてきた。ルナ

はその姿に驚いていた。

「な、ひのり！？ 先にいつてろつて言つたろー。」

「あたしのことになんかいいの！ ルナが心配で来たんだよ？ ね、あたしも手伝つから！」

ひのりはそういうて、笑顔でルナの隣にちょこんと座つた。そして、自分のかばんから持ち物の紙を取り出して、ルナの持ち物を乱暴に確認している。しかし、ルナの持ち物をみて声をあげた。

「うーん？ あのさ、なんで写真持つてんの？」

「はっ、えつ！ なんでつて……」

ルナは顔を真つ赤にしてうつむいた。その写真はクラスの男、「泉 大河」だつた。ひのりがうきうきしたような顔つきでルナに聞いた。

「す・き・な・ん・で・しょ…」

「ちちちちちちがう！ 決してそんな感情ではない！」

ルナの表情を見ると、ひのりは少しだけからかって見たくなつた。「じゃあ聞くけど、なんで写真があるのかなあ～？」

「う……、お、遅れるぞ！ もう8時だ！」

ルナは今度は体中真つ赤にして否定した。

「およ、もうそんな時間かい！ わあ、急げー！」

「……ありがとな、ひのり」

「わ、お礼なんていいのに！ ……できたよ！ 行げー」

ひのりはルナのかばんをルナの首にかけ、立ち上がつた。

「もういっちやつたでしょ、みんなもバスも」

「すまない」

するとひのりは待つてました、といわんばかりににっこり笑った。

「走れば追いつくでしょ！」

「・・・無理を言つな」

ルナは嫌な顔をして言つた。ひのりは相変わらず「ハーハー」としている。40キロも走り続けることは、人間には無理がある。

「あたしの背中にのつかつていいから！」

「・・・お前には、無理だ」

「まあ、いいから」

ルナはおとなしくひのりの背中に乗つた。ルナはクラスで軽いほうだ。同じぐらいの背の高さの人でも近くの場所なら簡単に運べるのだが・・・。今は違う。40キロぐらいいもの距離を走つて行くのだから。

「じゃ、いっさまーす！ ルナ軽いし、何分ぐらいかな？」

「・・・安全第一だぞ！」

ひのりは振り向いて、にこりと何も言わずに笑つた。そして、ルナの寮のドアを乱暴に開け、一直線に走つた。その速さは新幹線をぬきそうな勢いだった。

「おまえ……超人だな。走りの」

「ふおつふおつ、走りなら誰にも負けないのだよ、ルナ君」「すまないな、余計な手間をかけて……」

「いいの！ あたしはあんたに感謝してるんだ。だって、最近なまつてた足が活躍できるんだし」

ひのりはスピードを速めているわりには平気な顔で話していた。

しばらく走りながら話してると、前のほうにバスが見えてきた。

第4話 精神

走っているひのりたちの目の前に、バスが見えてきた。その前には、セトたちが宿泊する予定の『青少年の家』が見えた。バスの中の子供たちは前を気にしながらも後ろも気にした。一人がひのりとルナを見つけたからだ。

「ひのり、すゞーい！」

「はしってるよー、バスより早くない？」

バスの中の人たちはひのりを見て感心する。

ひのりはあいかわらず楽に走っている。そのとき、ルナが何かを思い出したかのようにひのりの肩をつかんだ。ひのりは笑いながら振り向いた。

「どしたの、ルナ」

「今まで、どうもありがとうな」

「うん、もうちょいだよ」

「いや、今度は私の番だ」

ルナはひのりからひょいっと飛び降りた。そして、自分の体重と同じぐらいのひのりを片手で軽々と持ち上げた。その後、両手で（お姫様抱っこの形になつたが）支えた。

「ちょ、ルナ？」

「少し痛いかもしれないが、お前なら耐えられる。バスの上に飛ばすぞ」

「あ、ちょ、まつて……」

ひのりが叫んだときにはもう遅かった。ひのりはすでに飛ばされていたのだ。からだが切り裂かれるような痛みに加え、いつ落ちるかわからない恐怖も加わっているのだから、怖さは倍増したはずだ。

ひのりは見事にバスの上に着地した。あまり痛くも無く、ふわりと着地できた。ルナの投げ方が良かつたのか、ひのりの着地が良かつたのかはわからないが。

「ルナ！ ありがとう！」

「ああ、それは……こちらの、セリ……フだ」

そういう残して、ルナはゆっくり倒れこんだ。

「え。ル、ルナーー？」

ひのりは叫んだが、その声が届くことは無かつた。ひのりも向かいくるかぜに耐えられなくなつたのか、やがて座り込んだ。すると、セトが窓から手を伸ばした。

「ひのりちゃん、ひつちー！」

「あ、ありがと、セト」

ひのりはかなり息が切れていて、立つていられないほどになっていた。

「すじいですねえ、ひのりちゃん～」

「ほんと、いつの間にあんなふうになつたのかじりへるいが間をおき、セトに続いて言つた。

「もつと、昔はすましかつたでしょひ？」

「あ、あ、時速、100、キロ……」「ほつ、
そのことを聞き、セトは驚いた。

(じ、時速100キロですか……？　は、はやいーーー！)
「ひのりちゃんは、超人並みの人よね」
るいの言葉に、ひのりはため息をつく。

「あ、あ、こんな、能力、はあつ、いらない、や。あ、たつて、化
け物だー、とか言われる、だけだし、『ほつ』
「わ、私はそんなこと無いと思うです……」
セトがポツリと、遠慮した様子でつぶやいた。

「せ、セトおおおおおー！　ありがとう、大好きー！」
ひのりは、うれしくてセトに抱きついた。その様子をクラスのみ
んなが見ていて、セトは顔を真っ赤にして我慢していた。
「ところで、ルナちゃんは後ろよね」
「うん・・・大丈夫かな？」
「あ、ルナちゃん、立ち上がってるー。」

後ろを見てみると、ルナはゆっくり腕を抑えながら立ち上がった。
そして、ゆっくり歩き出した。セトたちは、いや、クラス全員はル
ナの精神力に感心していた。

第5話 自らの分身『守護靈』

ルナの周りは、見渡す限り田んぼだった。ルナは体は軽いのだが、走りだけはなぜか苦手だった。なので、バスにはとつてい追い付かない。

「やはり、一人で行くのは無理があるか・・・」

ルナの手からは血が流れ、倒れた際に足もすつた。右手の自由が利かず、足も不自由なのだから、自由なところは限られている。息も荒くなり、今にも倒れそうだった。

「もう、だめか」

『オレ様がお前を自由にしてやろうか?』

ルナの後ろで声がした。ルナは驚いて振り返った。

「誰だ」

『オレ様はキサマの守護靈だ!』

守護靈と名乗る謎の生物は、ルナを見つめた。そしてまた、ルナも守護靈を見つめた。

「ふうん、守護靈か」

『キサマのな』

ふと何かを思いついたようにルナは、ポンっと手を叩いた。

「お前の名前を考えてやろうか?」

『何を突然。ふん、まあ別にいいか』

「じゃあ・・・うーん、ノアがいい」

ルナは嬉しそうな表情で守護靈をノアと決めた。ノアはまあいいか、というような顔をした。

『ルナ、だつたか。オレ様に捕まつてみなーん』

ルナがノアにつかまると、突然体がふわりと浮いた。ルナは突然の出来事に驚いた。その隣でノアが笑っている。

『相談があるんだ』

「私で良ければ相談にのるが

『ああ。あと三人、お前といつも一緒にいる奴がいるだろ?』

ノアの言葉にルナはこくりとうなづいた。すると、ノアの周りにピンク、赤、緑の羽が現れ、姿を変えた。一人目はピンク。髪の色は黒で、腰ぐらいの髪が外側にはねている。ピンクの瞳がセトに似ている。黒くて長いコートに、不思議なかたちの杖を持っていた。二人目は赤。ひのりにそっくりなポーテール。だが、髪の毛の色は赤だった。瞳の色も紅く、純粋な目であった。普通の服に、ミニスカートだった。

最後に生まれたのが緑色。緑色の髪を横縛りにしている。こちらも、るいと同じ瞳の色で、新緑の瞳だった。緑色のドレスを着ていた。

『こいつらに似ている人間がいるだろ? そいつに、こいつらを渡してくれ』

『私はかまわないが』

『すまない。さて、行くか』

ルナと守護霊たちは、青少年の家に向かった。

しばらくいくと、ルナはノアに話し掛けた。

「ところで、ノア。お前は男なのか?」

『さあな』

『ふうん』

ルナは正直、驚いていた。なぜ、自分の性別をはっきりといわなければ、と。

『まあ、キサマがなんと思おうが、オレ様には関係ないがな』

「これから、いろんなことがあるかもしねないが、その時はよろしくな」

「ああ』

「つきましたね~」

「なんだかんだ言って、ついたね!』

「さあみんな、荷物を降ろしましょ~う』

セトは眠そうに立ち上がり、荷物を降ろし始めた。ひのりもるい

も荷物を降ろし始めた。そんな中、ひのりはつぶやいた。

「アオイ、くれば良かつたのにね~』

「そうね。あんなにたのしみにしていたし』

「アオイ・・・?』

「あ、セトは知らないよね。アオイって子』

「友達になれますかね~?』

「多分なれるよ! 優しい子だから、あの子は』

「一度、見てみたいですね~』

「今日は遅れてくるかも知れないって』

ひのりは遠くを見つめる顔をした。そして、じつづぶやいた。

「来る勇気が・・・あるかな?』

ひのりのつぶやきは、セトたちには聞こえていなかつた。ひのりがこういうのには訳があつた。アオイもやはり前の学校でいじめられていた。ルナと同じ学校で。

「さ、いいつか!』

「はー!』

「おーい、はぐれるなよー」

先生の声が聞こえると、みんなは一列になつて並んで歩いた。セトは、初めて見る景色に見とれ、左右を繰り返してみている。そのうち、となりの花園小学校がばらばらに行動するのが見えてきた。「あ～ら、弱虫ルナちゃんが転校していつた葉巻学園だわ～」「貧乏くさい。キヤハハハ！」

と、わざと葉巻学園に聞こえるように言つた。ひのじとるいがその言葉を聞き、ムカツとした。ただ、セトだけは、なぜか花園小学校に見向きもせず、周囲の景色に目をやつしている。

「ちょ、セト、むかつかないの？」

「な～に～が？」

セトは悪口を言われていないことに気づいてはいない様子だった。

「向こうの小学校！ 悪口言つてるんだよ？」

セトはその言葉を聞いても、ただただ周囲を見つめている。そして、微笑んだ。

「楽しく過ごう。せっかくここにきたんだから」

その言葉で、ひのじもるいも次第に顔が緩んだ。

（せ、セトには人を笑顔にする効力があるのかな？ 不思議……）

ひのじはふと思つた。
ひのじはふと思つた。
ひのじはふと思つた。

ばたんっ！

セトたちの後ろでドアが閉まる音がした。真っ黒な車が見えた。その車からは、綺麗な金色の髪、温かそうなフード、そして銀色に光る斧だった。

「おくれたのわー。『めんなのさー。あつ、はじめましてなのね、こんにちは』

「いこいこんにちは・・・

セトは、太陽に照らされ不気味に光る斧に怯えていた。

「あ、この斧はよほどのことがない限り使わないのさよ？ あたしは刹那 アオイ！ よろしくなのわー！」

「少しひびくつしました～。私は如月 セトです～。よろしくです
「よろしくなのさ～。これからはあたしたち、友達なのさ～。ところ
で、ルナは？」

「後ろだわ

「あっ、ルナ！」

ひのりとるいが後ろを見ると、ルナが歩いているのが見えてきた。
バスから見た様子ではなく、もうすっかり回復をしていた。

「あいつらでいいんだろう、ノア？」

『ああ。頼む』

ルナは、セトたちのところに走った。セトはのんきに手を振つて
いる。ひのりはルナの元に走り出した。久しぶりに再会するみたい
に。るいとアオイも手を振つた。

「ルナー！ 着くの早いね

「ああ、こいつらのおかげだ

「だ・・・れ？」

「こ」の赤い奴をひのり、ピンクをセト、縁をるいこ、だそつだ

「へえ、名前は？」

「私は自分で決めたが、お前らのはまだだ

「名前、決めようね！ とりあえず中に入ろう」

ひのりの一言でみんなは中に入つていつた。ただ、セトはこんな
ことしか考えていなかつた。

(お皿はな～にかな？)

第6話 目覚めし人格

真っ赤に照りつけた太陽がセトたちのてっぺんに上る頃、セト達は食堂に向かっていた。中でも一番うかれているのはセト。いつもよりも二コ二コした顔で歩いていた。

「おひつるは、なあにかな？」

「セトちゃん、そんなに楽しみなの？ バイキング方式らしいわ～」「あう～！ ということは・・・食べ放題ですっ！」

セトは眼をきらきらさせてるいに迫っていた。るいは一瞬驚いた顔をしたが、やがてにこっと笑い、セトの頭を優しく撫でた。セトも穏やかな顔をして笑った。

「あらあら、またバカ学校がいるわ～、ご飯がまづくなっちゃうわね～」

「あはは、言えてる～」

花園小学校がまた悪口を言っていた。しかも大声で。セトがそのことを聞いて、花園小のほうに走り出した。

「誰がバカなのです～？」

セトは葉巻学園の悪口を言っていた人の目の前に立って、言った。花園小学校の女一人は小波 楓という名だった。もう一人は要力ナという名だった。

「臆病ルナとロボットアオイがいる学校がバカつてこと。少しばかりね～！」

楓は挑発するように言つた。セトは驚いた。アオイがロボットだと言つことを楓の口からきいてしまったからだった。

「アオイちゃんが、ロボット？ ということでしょうが？」

「そうよ、わたし、何でも知ってるのよー！」

「そんな訳……ないでしよう？」

みんながアオイのことを見つめた。みんなの冷たい眼にアオイは恐怖を覚えた。そして、強く斧を握りしめた。アオイがつぶやいた。「何、勘違いをしている……？ ロボットじやない。電腦人間だああ！」

アオイの瞳のいろが変わった。瞳の色は金から赤に。そして斧をぎゅっと握った。

「電腦人間は、データを消去されれば消える。そのデータを消去しない限りボクを殺せないよ……？」

「あ、アオイ……ちゃん？」

セトが驚いた顔でアオイに話し掛けた。

「ごめんね、セト。ボクはアオイじゃなくて……全くの別人、アクラ。アオイの守護靈……みたいなものかなあ……」

アクアと名乗る人格はどうやらアオイの守護靈らしかった。アクアは鉈を片手で振り上げた。そしてこう言つた。

「さて、ここで殺人事件をおこすのも嫌だよね……アオイも後に困るだろうし。また逢おうね」

そう言つてアクアはアオイと人格交代をした。

「うーん、あれ、あたし何をしてたんだっけ？」

アオイは何も覚えていない様子だった。どうやらアクアが表に出ているときは、アオイ自身の意識がどこかに行つてしまつようだつた。

「アオイ、ちやーん」

「ん、セト、どうしたの？」

「明日は土曜日ですよね～？」

「うん、それがどうしたのさ～？」

「今日着いて、2泊3日。土曜日の7時半にやる遊戯、見れないんですよ～」

「あ～、残念なのさ・・・」

セトはこうすることで話の話題を変えることが出来ると思いついた。しかもセトはそのアニメが大好きなので、話す話題に困らなかつた。

「あ、それと、『飯の時間ですよ～。いっぱい食べましょ～うね～』

そういうてセトは席に着き、「あ～、食べるぞーー！」と言つていた。

その様子を見て、ひのりたちも席に着いた。

食事が終わり、自分たちが借りる部屋に鼻歌交じりで歩いていたセトたち。

しばらく行くと、何もない場所で突然、セトが大きな音を立てて転んだ。そんなことも気にとめずにセトはすぐに起き上がり、再び鼻歌を歌い始めた。

「セト、痛くないの？？」

「なにがですか～？」

「ああ、セトちゃんは気づいていないのね・・・」

「私に何か、あつたんですか？」

「私は、セトがここまでマイペースだとは思っていなかつたな」

「??」

セトは、みんなの言つていることが分かつていなかつた。

というよりは、転んだことに全く何も気づいていないようだつた。

「ところでさ、この守護霊たちには名前はつけてないの？」

「うーん、そろそろつけましょうね」

「別々に分かれて付けてみるとどうかしら？」

「うん、しばらく自由行動だから、その間につけましょー。名前

を付け終わつたら、ここに集合です」

そう言つて5人は別々の道に行つた。

第6話　目覚めし人格（後書き）

す、すみません、遊 王知らなかつたですか?
でしたら、ごめんなさい、すみません。

これからもよろしくです。

第7話 名前

「はじめまして。セトっていいます~」

『こちらこそ初めまして~』

「名前、何がいいかな~？ 覚えやすいのがいいですね~」

『そうですね~』

「君もおつとり系だね~。リーフってどうですか？ リーちゃんつてよびますね~」

『ありがとうございます~』

セトは冬の冷たい風が吹く外に来ていた。セトの長く、白い髪が揺らいでいた。普通の人間ではきっと、耐えられないほどの中寒さの中にセトは、何事もないような顔で立っている。

名前が決まると、一人は建物の中へと消えていった。

「初めてまして！ ひのりだよ~ん！」

『こちらこそ初めまして！』

「君とはじめてあつたときから決めておいたんだ、名前。太陽みたいに元気な子だから、サン。どうかな？」

『わーい、わーい、嬉しい。ありがとうございます~！』

ひのりたちは1階と2階を結ぶ階段で、名前を決めていた。どうやらひのりは、元から名前を決めていたらしかった。なので、早く決まった。

名前が決まるといつた。

「あんた、非科学的ねー」

・・・初対面で失礼ですわよ』

「まーまー、そう言わないで。あなたの名前は、パンチヨ！　いい

『…あなた、济ミシグセンスなハですわ』

「名前付けてあげただけいいとしなさい。じゃ、これからよろしく

L

『先が思いやられるですわね』

るいたちは屋上に来ていた
と向かっていった。
適当な名前が決まると
集合場所へ

「あーあ、あたし、やる」となにのね」

アオイ

突然アオイの後ろから聞こえてきた声。しかし、振り向いてみても誰もいなかつた。それもそのはずだ。アオイは2階の手すりにもたれかかっていたからだ。

アオイ

クアがいた。

「だ、誰なのさ！？」

うん、君の守護靈・・・かな?』

『ま、一応すつとアオイの中にいるから。みんなの会話を聞いてれ

ば分かる』

アクアは見透かしたように言った。

『君が望むのなら消えるよ。いつでも、消えろといつのなら』

「・・・別にいてもいいのね』

『でも、いつまでもいられる訳じゃないし、寿命の問題もあるから。それまで、仲良くね』

アクアが言うと、アオイも笑つて答えた。

「うんっ、よろしくんなのさ』

ルナは、アオイから少しほなれた場所に立っていた。静かに、誰にも聞こえないような声で、しかも無表情で歌を歌っていた。その様子を、ノアが眺めている。

『・・・歌、好きなのか?』

「下手だが、好きは好きだ。歌によっては耳に残るものあるが、そんな歌はめったに聴かない』

『ふうん・・・』

ノアは黙つてうなづいた。ルナは今度は、薄い笑みを浮かべながら歌を歌い始めた。

「あ〜、ルナちゃん』

「セト・・・他のみんなはまだか』

「すれ違わなかつたですよ〜、まだ時間もありますし』

セトはいつもの笑顔で言つた。その肩の上には、リーフが座つていた。

「あ、この子の名前はリーフですよ〜、よろしくしてやつてください』

「あ、ああ。私の守護霊はノアだ』

「いい名前だね〜うんうん』

セトは首を縦に振った。

「おーい、セト、ルナー！」

「あ、ひのりちゃん」

「あれ、るいはまだなんだ？」

「ああ、まだだ」

「そろそろ来るよね！　あ、この子はサン」

『よろしく……』

サンは大きな声で言った。笑顔がまぶしかった。

「あー、みんな早いわねー」

「早すぎるのや・・・」

「あれ？　アオイは名前を決めなくたっていいんじゃない？」

「少しアクアと話し�込んだじゃない？」

と、後ろを向いて照れくさそうに言った。

『アオイが話を終わらせてくれなかつたんだろ?』

「あ、あははは」

アオイとアクアは、見た感じは息がぴつたりのようだった。

ピーンポーン　パーンポーン

『葉巻学園の生徒たち　各自の部屋へ移動してください』

放送が入った。今セトたちがいるのは2階。集まる部屋は3階だ。

「急げ、みなさん～」

「うん」

セトたちは急いで階段を駆け上つていった。

「はあ、はあ、守護霊たちは飛んでいいな・・・」

『人間のような愚かな生き物に生まれた』ことを後悔するんだなあ・・・

・』

「ノア、そんな風に言つなんよ」

『ああ、悪い悪い』

やつたちはやつと3階に着いた。

第7話 名前（後書き）

なんだかんだ言って、会話が多くなってしまい、
申し訳ございません。

次からは気をつけたいと思います。
次もよろしくです。

第8話 カヌー体験

セトたちは部屋へと全速力で走った。周りの人たちに注意されたりもしたが、そんなことは気にしなかった。しかし、走った甲斐もなく、まだ誰も来ていなかつた。

「あつれー、まだ早かつたかな？」

「別に、全速力で来なくても良かつたんじゃないのか？」

「きつ、気にしない気にしない！ そろそろ来るよ、みんな」
そう言ってセトたちは、3分ぐらいずつと待つていたが、誰も来なかつたもので、飽きてきた。

「・・・つまんないのです～」

「いりして待つてもだれもこないとは・・・」

また3分ほど待つていた。すると今度は、5～6人ぐらいの人影が見えた。全員女の子のようだ。

一人の女が近づいてきた。

「あーら、ひのりさんたち早いですね～。おーっほっほっほ～

「・・・あのさ、萌。そのしゃべり方、止めたら？」

少女は萌と言つ名だつた。こんなしゃべり方をしていると、相当の大金持ちのように聞こえる。しかし、口癖の割にはそんなに金持ちではない。

「わたくしは将来、金持ちになつて見せるんですよー！ おーっ

ほつほつほ！ 絶対ですわよ、ひのりさん

「人それぞれ夢も違うですもんね～頑張つてくださいな～つ

「あらあら、セトさん、応援してくれて嬉しいですわ～！」

萌は小躍りをしながら笑つていて。セトが苦笑いをのをする裏腹に、ひのりたちはそれをただ、笑つて見つめていた。

そんなことをしている間に全員がそろつた。

「これからカヌー体験をする場所に行くぞー。部屋に戻つて、水着に着替えて来い」

「「「「はーいー」「」「」「」

元気よく返事をした生徒たちは、各自の部屋に戻つて着替えをした。

「あー、カヌーも花園小と一緒かー」

「あんな奴ら、無視すればいいだろうが、ひのり」

「そうなのさ！ 無視なのさ…」

「それが一番ですよ～」

「そうね・・・気にとめないほうがいいわよ」

セトたちはもうとっくに着替え終わっていた。実は、高速で着替えていたのだつた。だからゆっくりと会話が出来るのだ。
守護霊たちは話し合つた結果、おいていくことになつた。

「あ、アオイ・・・」

「ん？ どしたのさ、ルナ」

「斧は置いていつたほうがいいとおもつが・・・」

「いーの、いーの！ 何かと便利だから」

するとアオイは後ろを向き、自分の首に鎧を突きつけた。

「たとえば・・・殺した人をバラバラにするとか・・・？」

そう、アオイは一瞬だけアクアに変化していた。

「つて・・・アクア！ 勝手に表に出てきちゃだめ！」

また人格がアオイに変わり、アクアは怒られた。しかしその表情もしだいに明るくなつた。

「うそそそ。斧は置いていくのさつ」

「持つていつて先生に取られても、しょうがないもんね・・・」「では、カヌー体験行きましよう！！！」

セトは相変わらず、のんびりした口調で話した。その表情は、いつもより格段に明るかつた。

セトたちはカヌー体験の場所に来ていた。葉巻学園の前に並んでいるのは、例の花園小だった。花園小はまたセトたちの悪口を言つてゐるようだつた。

「えーっ、またあの人たちと一緒に！？」

「最悪ー・・・」

「このことを聞いたアオイは、色々と、ぶつぶつ喋つっていた。

「何の怨みがあるのさね？ そのつるさい口を黙らせてやろうつかあ？」

「ふふふ・・・」

「まゝまゝ、アオイちゃん落ち着いて、ね～」

セトがアオイを静めた。

「・・・セト、ちょっとといいか？」

ルナは、セトにしか聞こえない声で言つた。そして、ひのりたちからかなり離れた遠くの場所に行つた。そして言つた。

「花園小の楓とカナ・・・私はあいつらに守護霊が憑いていると思う」

セトは急に真剣な表情になつた。

「ええ、私にも見えますよ、ルナさん。ずっとあの人たちに憑いて

いる、の守護靈が

「

その様子からすると、セトにも楓とカナの守護靈が見えていたようだった。

しばらくの沈黙後、ルナが口を開いた。

「あいつらにある心の闇を碎けば、あいつらも元通りになるはずだ。ずっと仲の悪いまま、宿泊体験をするのは誰だって嫌だろ？・・・？」

「そうですね・・・」

セトが言つとルナは静かに立ち上がり、ひのりたちの元へと帰つていった。

「続きはあとで話す。とにかく今は・・・」

「カヌーを楽しむのですよ～」

セトたちはみんなの元へと戻つた。

今、セトは感知していたのかもしれない。

カヌー体験のずっと後に起ころる長い戦いを

「か、カヌーって意外と難しいね、セト・・・ってあんたも漕げーつ！」

ペアは、セトとひのり、アオイといい、萌とルナ・・・という組み合わせだった。

セトは目をつぶつついて、全く漕いでいなかつた。ひのりは運転が下手なので、途中で色々なところにぶつかつた。その姿をセトは、のんびり眺めていた。

「さあて～・・・ひのりちゃん、一緒に漕ぎましようね～」

セトはゆっくりと漕ぎ始めた。ゆっくりだが、確実に、正確に進んでいく。

『ひのりちやんっ、ふあいと、おー！』

「さっ、サン・・・何でここにいるの・・・」

『そのちょーしですよ、セトちゃん~』

「リ～ちゃん・・・部屋にいるんじゃないのですか?』

『抜け出してきました』

「あらり・・・そ～なんですかあ」

セトは微笑み、よそ見をした。その時だつた。

がたんっ!

セトたちのカヌーが花園小のカヌーにぶつかった。そのカヌーは、

偶然にも、楓とカナが乗っているカヌーだった。

「ちよつ・・・危ない運転しないで下さる? セトさん!-!-」

楓が強い口調で言つた。セトは苦笑いをして答えた。

「ど～して私の名前を知つているかは分かりませんが・・・」

そこまで言つて、区切つた。セトは真剣な顔になり、言つた。

「その名前で馴れ馴れしく私を呼ぶんじゃねえ・・・!」

その言葉に楓とカナは驚いた。ついでにひのりも驚いた。こんなに不気味なセトを見たことがなかつたのだから、驚かないほうがあかしい。

「おおつと～・・・この性格は直さないと～です～」

そのあと、セトはすぐに元に戻り、明るくなつたが、しばらくひのりと楓とカナはセトに怯え、見つめあつていた。

第8話 カヌー体験（後書き）

展開が早く、申し訳ござりません。
更新は2、3日に一回ぐらいです。

きっとここからが重要になっていきます。
これからもよろしくお願ひいたします。

第9話 もう一つの影

「そろそろ部屋に戻るぞー」

先生の声が聞こえると、みんなはカヌーを片付け、部屋に戻った。そんな中ひのりは、一番後ろに行き、頭を抱えていた。

（ああ、あのセトは見間違えだつたんだ……！　あたしは疲れるんだ、あは、あははは……）

そんなひのりの様子を、セトは不思議そうな顔をして見つめていた。他の学校も、ひのりの様子を、なにか面白く生き物を見るのは田で見つめていた。

「今日はどうしちゃったんです？　ひのりちゃん」

「（あ、こつものセトだ……）ううん、なんでもないよーー！」

『ひのりちゃん、疲れたんじゃないのかな？』

みんなが不思議そうにひのりに声をかける。ひのりはわざと冷静なふりをしていた。

「頭がショートしたんじゃないのか？」

「なっ、ルナー！！」

ルナが言つと、ひのりはルナを追い掛け回した。先生もあきれた顔でみている。花園小の楓とカナはこつものように懸口を言つてゐるようだ。

「セト……あの話なんだが」

「はい……」

「あいつらの心の闇は、きっとお前にしか砕けない」
ルナはさつと言つた。まるでそのことを確信しているかのようだつた。

しばらく間をおいて、セトが発言した。

「な……んでですか？」

「・・・詳しく述べリーフに聞くがいい」

「あ、はい・・・」

話が終わると、みんなが先に行っているのに気がついた。二人は

走った。

しばらく行って、みんなに追いついた。

「はあ・・・もえ・・・さん、萌、さん」

「あら、セトさんどうかなさいましたんですか？」

「お願いがあります。その、さん付けは・・・止めてもらえないでしょうか？」

「わたくしは構いませんわ。セトちゃんでいいのでしたら、そういう呼ばせていただきますわ」

萌は不思議そうにおもった。

なぜ、セトさんと呼ばれてはいけないのか、と。

セトは『セトちゃん』といわれると、とても嬉しそうな顔をした。口調もさつきまでは怖かったが、元のようにゆっくりになつた。

「ありがとー、萌さん～」

セトは微笑んだ。

「い、いえ、ただ、ちゃん付けにしただけですわよ

「い、んですよ～、それだけでも～」

「お、おーっほっほ！ 当然のことですわー！」

萌は苦笑いをした。

「今日の夜ご飯は、自由だぞー。班の人全員そろつたら、食べなさい」

「…………」

葉巻学園の人々は、班ごとに並んでいすに座つた。他の班が食べ始めているのに対し、セトたちの班は、未だに食べ初めていない。まだセトが来ていなかからだ。

「セト……何処に行つたんだろ?」

「少し待つていましょうか」

その頃、セトは

「あ、楓さん……?」

「なつ、何であんたがこんな所につ?」

セトは楓たちのほうに行つていた。楓が下を向いているときには、ひょこつと顔を出したので、楓はかなり驚いていた。

「あ、驚いちゃつてますか? 食事中失礼致しますです~」

セトは手を腰に置いて、笑つて見せた。そして顔が豹変しきつ

言つた。

「小波 楓、要 カナ。もし良ければ、深夜0時に外に來てもうえ
るどひれしねあ~。あはははは」

眼の色は変わり、狂つたように高笑いをしているセトの前に、困つたように見つめあい、うなづきながら苦笑いをする楓とカナがい

た。

「あ、ではそろそろ戻りますね~」

セトは田の色を戻し、みんなの待つまづくと戻つていった。その後ろ姿は、なぜか小刻みに震えていた。

「あーっ、セト、遅いぞお！」

ひのりが叫んだ。

「あ、ごめんなさい~。遅くなつてしましました~」「どこに行つてたのさ?」

「ん・・・ちょ、ちょっとトイレに行つてきました~」

セトは一瞬、困つたような顔をした。が、つまくいい訳をした。

「そーか・・・じゃあ仕方ないのさね! も、食べるのさつ~」

そう言つてアオイは立ち上がり、『バイキングコーナー』へと向かつた。それに続きセトたちは、続々と立ち上がつた。

バイキングコーナーには、いろいろな物が並んでいた。野菜、肉、魚、デザート・・・学校の給食ではめつたに出ないものが田の前にあるのだから、セトたちは目移りしていた。

「な~に~食べよ~かな?」

「たーつくさんあるね!」

「夢は大きく、全種類食べますよ~! あははは~」

セトの目がキラキラと輝きだした。次々と皿に盛り付けていく。いつたん席に戻り、色々なものを一度に口に含み、飲み込む。この動作を繰り返していた。

食べ始めてから、30分が過ぎた。

「あと・・・このとうもろこしだけです~!」

あつとこう間に、とうもりこじ以外の食べ物を平らげた。

「ひへ・・・もひこひへ」

セツモヒトヒモヒコヒシを手に取つた。そのときだつた。

「おーい、そろそろ部屋に戻るぞー」

先生の声が聞こえた。セトはその体勢のまま、じつと立つてゐる。

しばらく間を空けて、先生が言つた。

「如月・・・お前、そんなに大食いだつたか?」

「あひつ・・・あとどうもひこしだつたですのこへ・・・」

やう言つて半べんをかいしているセトは、もう既にヒモヒコヒシをほおばつている。

そんなセトを置いて、他のみんなは『『めんね、セトちゃん』』と思いつつも、行つてしまつた。

「あひへ・・・待つてくださいよ~」

セトもどうもひこしを口に含み、半べそをかいたまま、みんなを走つて追いかけていった。その様子を、他の学校が高らかに笑つていた。

「あはははー 無様な姿だねー!」

楓は言つた。その言葉を、その場に残つた一つの影が聞いているとも知らずに。

第9話 もう一つの影（後書き）

読んでください、ありがとうございます。

『いつもより、読みにくくなってしまった』

と、反省します。

これからはちょっと書くのが遅くなります。
これからもよろしくです～

第10話 全ての眞実

セトはみんなを走つて追いかけていったが、結局みんなに追いつくことはなかつた。それどころか、途中で追いかけるのをあきらめ、階段のずっと下を見つめていた。

風が冷たかつた。

「ふう・・・

結局追いつきやしないです」

セトはつまらなそうに呟いた。

しばらくの静寂。

この場所に誰一人訪れることなど、なかつた。

「リー・・・ちゃん、いますか」

セトはリーフを呼び寄せた。

『セトちゃん・・・? どうしたのです?』

「教えてください。あの一人のことを。そして、私に起こっている変化を・・・!」

セトは、片手で壁をおもいきり殴りつけた。

『・・・分かりました。言います、いいのですね?』

「覚悟は出来ています、リーフ。全て、教えてください」

リーフは、セトの言葉に困りながらも小さくうなづいた。そして、重々しく口を開いた。

『セト、あなたはもう感知していたのかもれませんが・・・。

あなたは人間ではありません。ついでに言つと、あなたの一番近くにいるお友達4人全員が、人間ではありませんですよ』

「...」

『この世界はもちろん、人間の住み着くための星、『地球』です。

しかし、あなたは人間ではない。

お分かりですか？　あの楓とカナも『ニンゲン』という生き物ではない、『バケモノ』といふいきものです。
あなたは　『女神』といふ生き物です。

別世界から派遣された、人間とは全く違う生物。あなたは、世界を救う存在……です。

・・・私が言えることはこのぐらいでですよ～？』

「そ、そうですか・・・。おしゃれてくれてありがとうございます、リーチちゃん」

セトは苦笑いをしながらも、体は小刻みに震えていた。自分の眞実、仲間の眞実、楓たちの眞実を知った今、自分には何が出来るだらうつか？　セトはそう考えていた。

『楓とカナという者がいましたね　。その人は『心の闇』に蝕まれているでしきうね～・・・』

リーフは不気味な顔をして言った。

しばしの沈黙が続き、セトがもう、耐えられない！　といつ風に口を開いた。

「私に・・・何をしろと言うんです　！」

『言つたでしきう・・・？　あなたは『女神』、世界を救う生物。あの人たちの心の闇をうち碎くのです！

その行動がやがて、この狂つた世界を救う方法となるのなら

『

セトには、リーフの発している言葉の意味が理解できなかつた。ただ一つ分かることは、『楓たちを救う』といふことのみだつた。

「あ・・・」めんね。長く説明せてしまこまして……。行きましょう、みんなのもとく」

『はい、セトちゃん!』

セトとコーフは、みんなの元へと歩いて向かった。

「せんせーつ、セトちゃんがいませーん」
ひのりが先生に向かつて叫んだ。それと同時に、急にみんなが心配し出した。

「セトちゃんがいませんですか?」

「場所、知ってるのかな?」

「そのうち戻つてくるだろ?」如月の班だけ先生のところにいる。他の人は部屋に入れ

みんなのいつもの元気な返事、やんちゃな返事が返つてくる」とはなかつた。それほど、セトを心配していると言つことだらひ。「お前らは、如月と一緒にじやなかつたのか?」

「はい、一緒ではないのですよ」

先生の問ひに、即行で答えたのはひのりではなく、るい、ルナ、アオイでもなく、セト自身だった。セトは、るいの後ろに立つと立っていた。そのセトの行動に、みんなはぎょっとした。

るいは、セトがずっと立つていたのにも関わらず、今までずっと気がついていなかつた。視線も感じない、気配も感じなかつたらしかつた。

「せ、セトっ! 心配したんだよー」

「『みんなさー』。食べてたら、遅くなつちやつて……」

ひのりの言葉に、セトは笑顔で答えた。

「皆さんには『迷惑をおかけいたします』です～」「これからは迷子になるなよ～」

「「「「はーい」「」「」「」」

5人は、自分たちの部屋へと戻つていった。

セトたちの部屋は、萌と藍と言つ人と同じ部屋だった。藍は、葉巻学園でとても神秘的な女として有名だった。

「みんなの分、布団引いた・・・」

「藍ちゃん！ ありがとぐす！」

セトは思わず藍に抱きついた。

「セト、照れる・・・」

藍は、微笑んだ。

「で、セトちゃん。今までどこにいたの？」

るいが笑いながらたずねた。セトも笑つて言つた。

「みんなが見えなくなつてしまつて・・・道も分からなくなつてしましました。冷静に考えたら、二階だと言つたことが分かりました。いや～、戻れてよかつたのですよ～」

遠くを見るような目で、まるで独り言のよつな喋り方だった。棒読みのようにセトは言つた。

言い終わると同時に、部屋をノックする音が聞こえた。

「おこ、風呂だぞー」

どうやら風呂の時間のようだ。セトたちは大きくなづいた。だが、アオイだけは下を向いていた。

「斧つて、持つていつても問題ないのさ？」

「お、お風呂に斧を持つていくの！？」

ひのりは驚いて、たずねた。

「だ、だつて、その、アクアを置いていくなんて、かわいそつなのれ」

アオイは途切れ途切れに、照れながら言つた。

『アオイ・・・ありがとう』

アクアも微笑んでいた。

「よおひし、お風呂でつかよ~ー...」

「うそ、こじりー。」

セトたちが楽しそうに部屋の外に出ると、もひせのみんなは、先に立っていた。セトたちは、苦笑いをしながらお風呂へと向かうことになった。

第10話 全ての真実（後書き）

大変申し訳ございませんっ！

遅くなつてしましました。

遅くなつてしまつた上にこんな駄文で・・・すみません。

これからも、更新がとてもなく遅くなりますが、よろしくですっ

！

第11話 見える、見えない。

風呂への道順は、先生から知らされていたので、すぐに分かつた。
階段を下り、一階の一一番奥の部屋。

そう暗くもないが、明るくもない廊下。

そんな中、アオイが手で持つて いる銀色の斧が、 よりいつそう輝いていた。

「皆様、さつきから気になつてしうがないのですわ」

萌が不思議そうにセトたちに話し掛けた。その後を、藍が続けた。

机にいる変なの何

△人は自分の肩を見一めた
△人それはの△、語靈力
△人には△は△

「あれれれ、見えていたのですか～？」

「ひのり、聞いているのは我。その変な生き物は何

藍は首を傾けながら、ひのりに聞いた。

ひのりは、どう答えれば良いか迷っていた。

『あたちたちは、守護霊っていうんだよ。』

サンは、笑いながら藍に言った。意外にも藍と萌は、納得するの

『おもじやまこみー。守護霊だせん

萌が言つと、サンはふうと膨れた。萌は笑つた。

「おじいちゃん」がおじいちゃん『さとう』ですわねーっ、おーっほひまく

「我には守護霊という非科学的なものは信じられない」

藍は、またも首をかしげながら、守護霊の存在を否定した。目の前に、本物の守護霊がいるにもかかわらずに。藍の言葉を聞いて、セトはリーフの首をつかんだ。リーフは目を丸くして叫んだ。

『なつ、何するんですか、セトちゃん……』

「藍ちや～ん！　ここに本物がいるので信じてあげてくださいな～」

セトは、リーフの言葉を無視し、笑いながら藍に向かつて言った。リーフは無視されたので、腕組みをして脇れてくる。

「守護霊……信じてあげてもいい」

藍が言つと、守護霊一同は笑い、そして泣きながら両手を挙げて喜んだ。

「みんな、急ぎましょ～！」

セトたちは風呂に向かつた。

ひのりは、息を切らして呟いた。ひのりだけではなく、他の5人も息を切らしていた。

「遅いぞお前ら・・・」

先生がセトたちに言い、ため息をついた。ふと見ると、まだみんな風呂には入つていなかつた。セトたちを待つていたのだった。

「先に入っちゃうと悪いかな？ つて思つて…」

「だな」

みんなは笑顔でセトたちを迎えた。そんな中、一人つれない顔をした少年がいた。

その少年は加藤 のりお。5年1組で最も乱暴で、みんなから嫌われ、怖がられていた。特に、アオイはのりおをかなり嫌っていた。何故かは不明。

「つたく、遅れてんじゃねえよ、女ども！」

「のりお・・・そんな言い方ないのさー」

アオイの銀の斧が暗く光る。そこに潜むアクアは、アオイの心の奥でそつとこの様子を見つめていた。何にも言わずに、静かに・・・。

「遅れたのはてめえらのせいだろ！」

「ああ、それはすみませんなのさ！ でもそんな言い方ないのさ」「オレに口答えしてんじゃねえよつー！」

「この・・・む」

アオイがその先を言おうとした瞬間、セトたち以外に姿の見えないアクアが、アオイの口を塞いだ。アクアは冷たい目でアオイを見つめる。

『アオイ・・・これ以上口げんかをやつてると、風呂に入つてる時間が短くなるよ』

アオイはアクアをじつとみつめた。

しばらくの静寂

その後に口を開いたのは、アクアだった。

『争いはとつてもいけないよ。決してやつてはいけない』

「だ、だつて・・・」

アオイは何か言いたそうにアクアをみつめている。

『あの人は、ボクが何とかしておくから、ね？ ボクを信じて・・・』

アクアはアオイの髪を撫で、微笑んだ。アオイは、しばらくアクアを見つめていたが、やがて小さくうなづいた。

「おい、アオイ。何を独り言いつてるんだよ！」

「え、あ、何でも・・・」

やはり、アクアの姿はセットたち以外には見えていなかつた。他の人間から見ると、アオイが独り言を言つてゐるようにな聞こえているのだ。

「変なやつ・・・つーか、とつとと入ろうぜ」

のりおは、一人で勝手に行つてしまつた。その様子を、アクアが真つ赤な眼で見つめていた。

「眠いです～、早くお風呂から出て寝たいです～」

そう頭を洗いながら亥いたのは、セト。セトは、長く白い髪を洗うのに入1倍の時間がかかるのだつた。

『セトちゃん、私の髪も洗つてください～』

「あたしが洗つてあげる、リーフちゃん！」

ひのりはシャンプーを手にとり、リーフの髪を丁寧に洗い始めた。

「すみません、助かります」

「いーのいーの！ 長い髪は洗うのも大変だからね」
ひのりは笑顔でセトを見た。セトも笑顔で返した。

「のあーつ！ 大変なのさ！」

アオイが風呂場を駆け回り始めた。時折転ぶこともあったが、そんなことは全く気にしていない様子だった。みんながアオイに注目した。

「アクア、アクア？ ねえ、アクア」

何度も斧に向かつて語りかけるアオイ。いつもは、斧から明るい返事が返ってくるはずが、今日はまるつきり返事は来ない。アオイは泣き出した。

「うえーつ、アクツ、アー・・・」

『呼んだ？ アオイ』

今度は斧からではなく、アオイのすぐ後ろから声が聞こえてきた。
アオイはすぐに認識した。

アクアの声だ、と

第1-1話 見える、見えない。（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。
大変遅くなりました。

読者様の信頼を失つてしまつたら……と、考えたくもありません。
次も遅くなつてしまつたら、すみません、なるべく頑張ります！

第1-2話 風呂で、そしてロビーで。

「アクア、いるなら返事をして欲しかったのさ・・・」

『ん、ごめんね・・・』

アクアはアオイの髪を撫でた。アオイは目を赤くしてアクアを見つめた。

「どうして・・・返事をしてくれなかつたのさ?」

『・・・なんでもない』

しばらく間を空け、アクアは答えた。

アクアがはやく答へなかつたのは、理由があつた。

実はアクアは、のりおの後を憑いていつた。

『タノシイカ・・・? クラスト、シキルコトガ』

アクアは、のりおのすぐ後ろで呟いた。当然、のりおには姿は見えない。

「誰だ、オレの背後に立つな!」

『ボクノコエハ、イマハキミダケニシカ、キコエナイ・・・ムダダ

三』

怯えるのりおの頭を、そつとアクアは撫でた。いつもアクアはそうだった。怯える人を見たり、悲しむ人を見たりすると、頭を撫でて安心させていた。

『ま、怯えないで。今回はキミと話をしてみたかっただけ・・・またね。』

あ、そりそり。

あんまり調子に乗つてると、ボクに代わってアオイがキミを処分するよ・・・いいね』

アクアは赤い眼で見つめながらそれだけ言って、白い霧に消えていった。のりおはその姿をにらみ付けていた。

とのことだった。

「人それぞれ、色々な理由がありますし・・・返事をしない理由も色々あるのです」

「ん・・・そだね。今度から返事をするのさよ? アクアアー」

『はいはい』

「ねえ、のりおさん。誰とお話を?」

ここは男子湯。大河がいきなりのりおに寄り、話しかけた。一瞬からだを震わせ、怯えたのりおだったが、すぐにいつもの態度をとつた。

「てめえには・・・関係ねえんだよ」

「関係あるよ？ 困ったことがあつたら、なんでも相談してね。じゃあ、僕は出るね」

一方的に言つた大河は、最後に、にこりと笑つて風呂場を後にした。その姿を見てのりおは、先ほどのアクアを思い出していた。

「あいつは・・・いつたい誰なんだろつか？」

夜8時。葉巻学園の生徒たちは、全員風呂から上がつた。バラバラになりながらも中央のロビーに向かつた。セトたちは、世間話をしていた。

「もしもですが・・・富士山が噴火活動を開始し始めた、としたらどうなると思います？」

セトが、長い髪をタオルで拭きながら、みんなに聞いた。

「ん〜・・・もう二百年以上も噴火していないらしいし、大噴火になります」

「静岡のほうは大変なことになりそうだな」

「家が溶けたりもするのさ？」

「ここ、千葉も火山灰が降りそつだわ」

「逃げることは出来ないんですの？」

「逃げることは可能かもしれない。人間は、逃げ惑う」とぐらいしか出来ない」

みんなそれぞれが、自分の思う『本音』を口にした。ひのりが、手をポンッと叩いた。

「あたしのいとこが静岡に住んでるんだけど、本当に富士山が噴火したら死んじやうね。あははは

ひのりが笑つて言つた。実際は、笑つて済む話ではない。

「皆さん、ここからは真剣なお話です。聞いてください。もしもこの周辺に火山灰が積もるとします。

そのシーンを頭に浮かべて見てください。

キラキラと火山灰が舞い降ります。綺麗だ、と思つのは最初のうち。

火山灰の積もる量はどんどん増え、積もり始めます。

そのうちに、火山灰の混じつでいるにごった雨が降り注ぎます。その雨は人体に影響を及ぼし、電力も停止します。

それが2週間以上も続く。

ね、大変なことになるでしょう・・・？」

セトは簡単な説明をした。その説明に、みんなは体を震わせた。

「なんか、分かりにくくてすみません～」

セトたちはロビーに着き、椅子に座った。

「本当に想像しちゃうな・・・怖い」

「つまらない話ですみません～」

セトが頭をかきながら言いつと、アオイはセトの顔を見つめ、首を

大きく振つて否定した。

「つまらなくなんかないのさー、とつても為になるのさー！」

「・・・ありがとうございます！ アオイちゃん！」

セトはアオイの手を握り、目をキラキラさせた。アオイもセトの手を握り返した。アオイとセト、一人の友情が深まった瞬間だった

(?)

「そろそろ部屋に戻るぞー！」

ロビーに先生の声が響き、葉巻学園の生徒たちは立ち上がった。
そして、先生の後をついて行つた。

第1-2話 風呂敷、そしてローラー。（後書き）

こんには、読者様方。作者です。
更新遅くなりました。

最近は楽しんで小説かいてます^ ^
次はなるべく早く更新を・・・したいです！

でわあつ、また！

第13話 呪文めぐ言葉

深夜0時数分前。

窓から見える景色は暗く、もつ町のビルなどは薄っすらとしか見えない。星や月が地上を照らす。

『太陽ほどじやねえが、月も明るいぜえ』

ノアはパンチョと並んで歩いていた。ここは明かりの付いていない、昼は太陽の、夜は月の明かりだけを頼りにして歩く、という廊下だった。

『そうね、綺麗だわ』

『オレ様はもう、綺麗なんて言つ感情は忘れちまつたな』

パンチョの言葉に即答すると、ノアは月明かりのある地上とそれを照らす月を交互に見つめた。

『久しぶりに、綺麗なんて思つちました』

『いつもこいついう風に素直だと可愛いのにねえ、フフフ』

パンチョも月を見つめた。すると、ノアがパンチョに手招きをし

た。ノアはそつと窓を開け、外に出た。そして、座り込んだ。

『お前も座れ』

『うん』

パンチョもノアの隣に座った。

風は、前の季節、『冬』と比べてみると、暖かかった。今夜はあまり風は強くなかつたが、それでも冷たく感じるのだから、風の強い日はもつと冷たいのだろうか。

『私たちの故郷、聖界せいかいには四季なんてなかつたわね』

『だな。人間界はとてもと言つていいほど美しい。しかし、せつかくの自然を人間が壊そうとしているのはなぜだろうか?』

『少なくとも、るい達じやないわ』

『フ・・・お前は昔から人を信じ抜くタイプだつたなあ？』

ノアは微笑みながら言つと、今度は目の前にある力ヌー場を見つめた。水面に映り、揺らぐ月がひとり輝いて見えた。

『お前にだけオレ様の秘密、ちつと教えてやろう』

『？』

ノアはパンチョを近くに寄せ、そつと耳打ちをした。

『・・・まあ、喋り方とかをみれば男ね』

『つーかさ、守護霊の中でオレ様だけ男だと居辛いんだよな。だから、他のやつにはオレ様は女だと言つといてくれ』

ノアはパンチョに手を合わせて頼んだ。その様子を見て、パンチョは快く頷いた。

しばらく2人は水面を見ていた。

突然パンチョはノアの手を引き、外に飛び出した。

『な、何だよパンチョ？？ 急に』

『るいたちの部屋は一階よ。行くわ』

一階の方面に向け、2人は飛び立った。

一階のセトたちの部屋は、寒いのに何故か窓が開いていた。風に純白のカーテンがなびいていた。るいたちが動く様子を見て、まだみんな起きている、とパンチョは感じた。

「パンチョ・・・？」

るいが目覚めた。すると連鎖的にみんなも起きた。だが、何故かセトは起きない。それどころか動く気配すら感じられない。

「セトちゃんは熟睡なのさ？」

「だな。疲れが出たんじゃないか？」

「カヌーとか漕ぐのは疲れたなあ、ははは・・・」

ひのりたちは眠くないらしく、かなりの時間喋っていた。その声はかなりうるさかったが、セトは動かない。実は、そこにセトの姿はなかった。布団を丸めて、人間がいるように見せかけていた。

セトは青少年の家の外で、楓たちを待っていた。背伸びをしたりしながら、気楽に。

「や、やつぱりいるのね」

「如月セト」

「やつと来ましたかあ。実は、お話ししたいんですよ~」

セトは、笑いながら2人の手を引いてカヌー場に腰掛けた。そして、楓の目を見つめた後にカナの目を見つめた。楓とカナに寒気が走った。

「仲良く、楽しく過ごせたら、どんなにいいかと思いませんか～？」
「…は？」

2人は声を合わせて言った。

「そりや、楽しく過ごせたらいいと思うよ」

「でも、何でかいつも悪口が…」

言い終わつた後、つい本音が出た2人は口を抑えた。セトはうんうんと頷いた。

「仲良しが一番。それはどんなに人間の心が闇に支配されようとも、変わらないことなのです。2人はとっても素直ですね～」

セトは天使のような笑みを浮かべた。その様子を見て、楓とカナもいつもより穏やかな顔になつた。セトはもう一言付け加えた。

「いかなる時も、いかなる場合でも、友たちを信じ抜き、見捨てないことを私は願い続けます。やがて訪れるかもしれない朽ち果てた未来を覆す、第一歩の前進になるならば…」

セトの言葉は、どこか呪文めいていた。

第1-3話 呪文めぐ言葉（後書き）

早く更新するといつていたわりには遅くなってしまい、申し訳ござりません！！！！！！

次の更新は未定です（遅くなるか、早くなるかすら分かりません）。また！
では、読者様（いないと思いますが）。また！

第14話 魔法の使い方

冷たい風はだんだん強くなり、先ほどにも増して寒くなつた。セトのもとにリーフがやつて來た。

「あなた達にも見えますか？」この、リーフといつ守護靈の姿が

「え、ええ」

「見える・・・わ」

2人はゆっくり、軽く頷いた。

「全ての生き物は生き、そして死ぬ。それはどうやっても今の科学では覆せません。あなたたちは、その宿命さだめを背負つて生まれてきた魂」

セトは月を見つめた。先ほどの月とは全く異なり、明るく黄色かつた月が、不気味な笑みを浮かべているように紫色に変化している。「さ、中に入りましょう?」

セトは微笑み、2人に手を差し伸べた。カナはセトの手をつかんで立ち上がつたが、楓は暗い顔をして座りこんだまま。

「わたし・・・まだ如月セトがどんな人か分かりきつていないので、信じられないの・・・」

「始めのうちは、ひとを信じられないのは当たり前です・・・私もあなたを信じる。これで、信じてもらえますでしょうか?」

「かつ、考えておくわ」

楓は、建物の中に走つて消えていった。カナも楓を走つて追いかけた。

「行きましょうです、リーちゃん

『はい』

セトとリーフは歩いて建物の中へと入つていった。

「みんな、寝てますでしょ？ 寝てなかつたら私、どういい訳をすればいいのでしょうか？」

『大丈夫ですよ～きっと。見てきますか～？』

リーフが言つと、セトは頷いた。その姿を見たリーフは、部屋の方向へと飛び立つた。

「みんな、寝ていなかつたらどうしましょ？ あ、そうか、トイレにいっていたといえばいいんですね？」

『セトちゃん、みんな寝てましたよ』

「よかつたです～、さあ、早く寝ないと明日は早いですよ」
セトは数回ジャンプしてから、部屋に走った。途中、転びそうになることもあつたが、何とかバランスをとり、再び走り出した。

「誰ですかっ！ 走つてるのは！」

どこかの先生が、セトに向かつて怒鳴つた。寝ぼけているのかを確かめるため、セトは悪口をいつて確認して見ることにした。

「ううそいです、この迷惑騒音ババア、腐つた・・・

「何言つてんのっ！ 私はまだ若いわー！」

「ビリヤー」の先生は、寝ぼけたままだった。ビリヤーの先生は、セトの後を走って追ってきた。セトは必死になつて逃げたが、つかまつてしまつた。

「覚悟しなさいっ！ おほほほ・・・・

『スリーブ・ザ・メロディー』

リズム良くリーフが叫ぶと、どこかの先生は倒れるように眠りについた。セトは先生の手をじかすと、リーフに今のこと尋ねた。

「今のは、どうやったんですかっ！？」

『魔法ですよ～う、はあはあ、きっとセトちゃんも練習すればできますよ～。』

リーフは少しだけ息を切らしている。セトは心配した。

「息、切れていますが大丈夫ですか？」

『これも魔法を使うためですしね、慣れましたから。魔法を使っているあいだは、息を止めないといけないんですね～』

どうやら魔法を使つては、息を止めていいといけないらしかった。なんとも大変だ。

「た、大変ですね～・・・なるべく魔法を使わないでください。大変な負担になりますし」

『でもセトちゃんがピンチの時は、体力ギリギリまで魔法を使いますよ～、えへ』

「そ、そんな、いいですよ～、リーフちゃん」

セトは首を思いつきり振りながら歩き出した。リーフも、けたけた笑い続けながら歩き始めた。

第14話 魔法の使い方（後書き）

遅くなりました（いつも言っていますが）。

ほんとうに駄文ですね、これ。

（絶対いない）読者様、これからも支援をお願いいたします！（支援をしてくれる方なんて、きっとないですね～）では！ またお会いいたしましょう

第15話 突然の問い合わせ

しづらしく笑っていたセト達だったが、今度は迷惑をかけないように黙つて歩き始めた。しづらぐの間歩くと、自分たちの部屋が見えてきた。

静かに自分の部屋に入ると、真正面にある窓をふと見つめた。カーテンの揺れは強くなり、風も冷たくなってきた。ひのりたちは、セトがやつてきても起きることなく、安らかに眠っている。

「みんな、よく寝ていますね~、私も寝ないと。おやすみなさい、リーチちゃん」

『ハイ! おやすみなさい~』

リーフに軽く挨拶をし、みんなを起こさないように、セトはこいつり布団に入った。先ほどまで、冷たい外にいたのだから、布団の中はあたたかく感じた。

セトがしづらぐ扉を開じていると、眠くなつてきた。すると、リーフが小声で話し掛けってきた。

『セトちゃん、起こしてしまつて大変申し訳ないのですが、

魔法を、使ってみたくはありませんか?』

リーフの言つことはあまりにも突然すぎた。セトは、驚いたあまり立ち上がり、2段ベッドに頭をぶつけてしまった。

「いたた・・・ま、魔法なんていいですよー。私には必要ありますん~!」

ぶつけた頭を、さうとさすりながら、強くやう言つたセトだったが、実のところ心の中では、一度だけでも使ってみたいと思つていた。

『そりですか? ほんとうは使いたいんじゃありますん~?』
リーフはにやけながら呟き、最後に『素直じゃないですよ~?』と付け足した。セトはあくまでも素直になれないらしく、首を振り、否定し続けた。

『ではでは尋ねますが、みんながもう既に魔法が使えるとしたら、セトちゃんは使います~?』

「え・・・?」

リーフの言葉に、セトの動きが止まった。動搖したセトだったが、勿論リーフの言つことは嘘だ。ひのりたちは魔法が使えない。

「みんなも、魔法が使えるんですか・・・? ならばー!」

『もしもの話ですよー、もしもの。ではこれからみんなを起しにして、魔法が使いたいか聞いてみましようか?』

リーフは、どこで手に入れたか分からぬメガホンを手に、ひとりたちをおこなうとしていた。リーフが、口にメガホンをあて、息を吸い込んだとき、セトは慌てて止めた。

「だつ、ダメですよ～！ みんなは安らかに眠りに付いているんですから！」

『じゃあ起きたらこしましょいね～。起こうとすみませんです』

リーフはぺこっと頭を下げ、暗闇に消えた。セトも一つ、頭を下げて眠りに付いた。セトは気づいていなかつたが、いつのまにか、窓が閉まっていた。

翌朝6時。まだ太陽の光が窓から差し込んではいなかつた。昨夜と比べては暖かく、やわらかく感じた。昨日遅く眠りについたセトは、まだ小さく寝息を立てて眠っている。毎朝、早起きのるいは5時半、じろからずつと起きていた。

るいは、起きていてもやることがなかつたので、ベランダに出て微笑みながら、日の出る様子をそつと見守つていた。

「きれいだわ・・・太陽つていいわね」

小さく笑うと、少しだけうつむいた。その姿を見てパンチョは、るいのすぐ後ろに来てから、るいの周りをふわふわ飛んだ。

「パンチョ、今日はきっと快晴よ。・・・といひで、セトちゃんのことじう思つ？」

るいはパンチョのほうを向き、突然聞いた。パンチョは、一瞬困つたような顔をした。そして、苦笑をして小さな声で答えた。

『私は・・・』

第15話 突然の問い合わせ（後書き）

更新が遅くなつた上、いつもより短くなつてしまい、申し訳ござりません！ こんな駄文でも読んでくださつて感謝します！！

では、次もよろしくお願いします。

第16話 生体実験

『まだ詳しく分からないわ』

パンチヨは苦しそうな表情を見せた。こんなことを聞いてどうするのか、と、パンチヨは疑問に思つた。少し間を空けて、るいが口を開いた。

「そうね・・・私も分からない。あの子を生体実験したいけど・・・あの子のことは詳しく調べる必要があるわ」

「何を詳しく調べるので」『やれこましょつ?』

「それはあの子の体を1週間液体につけ・・・つて、萌ちゃん!/?るいが気がつき振り向けば、萌がにやりと笑つて立つていた。

生暖かい風が吹き荒れ、よりいつそう雰囲気を出す。

しばらく一人が見つめ合つていると、萌が怪しげな笑みを浮かべてくちを開いた。

「大丈夫ですわ。今ることは、聞かなかつたことにするですわ。私も、そろそろ引っ越すのでござります。だからそれまで私が言わなければいいことですわ」

萌は、とたんに顔が悲しそうになつた。どこか遠いところに、そろそろ引っ越すようだつた。るいも何故か悲しそうな表情を見せた。「もしも私が誰かに言つてしまつたら、用無しの私を殺せば良いことですか?」

軽々しくそう言い、笑つた後、るいと萌は部屋の中に入つた。
(如月セト・・・1度あの子の生態を調べてみたいわね)

ボーン、ボーン、と少し錆び付いた古時計がなり響き、時計は6時を指していた。この時計は、実際の時間より遅れているようだつた。再び、萌は眠りに付いたが、るいは起きて「起きてくる」と決めた。紙に、実験の様子を想像して書きはじめた。

「「」の水溶液にセトちゃんを入れるには・・・リーフに協力してもらいましょう。」

「」の液は、メタミドホスとパラチオンを大量に入れて・・・ついでに青汁も、ね。「ふふふふふ」

小さく、そして不気味に笑つたるいは、調子に乗つてしまい、みんなが起きるまでずっとかき続けていた。しかし、青汁はたぶん関係ない。

「んーっ、すがすがしい朝だねーっ、ルナーっ」

「・・・つるさいぞ、ひのり。私はまだ寝る」

ひのりが話し掛けるが、ルナは眠いらしい。一生懸命、ルナを起こそうと体をさすっているうちに、ルナはイラつき、飛び起きた。

「あ、～、眠気が覚めたじゃないか！！」

「ははははは、あたしの根気の勝ちだね」

ひのりはピースをした。ルナは呆れたのか、ぐつたりとしたまま、ひのりを見つめる。

しばらくすると、ルナは再び布団に潜り込んだ。それを見てひのりは、もう一度ルナを起こそうとした。しかし、跳ね除けられた。

「おーい、起きてくれよ。おーい、ルナ？ ルナちゃん！ ・・

・ぶう」

ルナは、もう既に熟睡していた。ひのりがどんなに体をさすっても、起きる気配がない。そんなルナに飽きたのか、ひのりも自分の布団に戻り、眠りについた。

「・・・セト？ 起きてる？」

布団に入り、眠ったかと思いや、次のターゲットはセトになつたらしい。自分の布団を脱ぎ捨て、セトの布団に向かい、セトの上で小さくジャンプを繰り返した。

「セト、ダイレクトアタック！」

「んー、トラップ・・・発、どう・・・」

何とか答えたセトだが、すぐに眠りについてしまった。ひのりは、今度はるいの布団に向かった。しかし、るいはまだ、実験の様子の紙を書きつづけていた。

「るーーっ・・・・？」

「つ・・・・ー？」

紙を覗き込まれて困惑する、るい。それを見てひのりは、顔を歪めた。

「何を・・・しようとしてるの？」

「ひのりちゃんには・・・関係ないでしょ！ 観る見はいけないわ

るいはひのりをにらみ付けた。ひのりは、1歩退いた。しかし、

負けじと言い返す。

「なんでもうこいつ」と書くのへ？ 仲良く過いなつむーね？

第1-6話 生体実験（後書き）

こんにちは、お久しぶりで『jyaku』ます。作者です。

自分でもびっくりするぐらい更新が遅くて「めんなさい」！
1部分かりに「い」ところがあります。反省します、「めんなさい」。

こんな駄文を読んでくれている方々！ 本当に感謝致します！

ではまた。

第17話 寂しい」と

「私は！ ただあの子の生体を調べたいだけよ！ ……あなたには、私の何もわからないわよ」

るいは、何かが気に入らなかつたらしく、ふいつと後ろを向き、ひのりから目をそらした。ひのりは、少し言に過ぎたと思い、悲しそうに呟いた。

「「めんね、るい。でもね、まだセトは転入して来たばかりなんだよ？ 差別はダメだよ。仲良くしよ？」

そのひか、ふと何かを思つたのか、ゆっくりとひのりを見つめる。

「いいわ、セトちゃんの生体実験を止めても良いけどねえ？ その代わりに」

ひのりは、急に態度が変わつたるいを、びいか変だと思つた。ひのりの背中に、寒気が走つた。

「その代わり・・・何？ セトちゃんが救われるなら、あたしはなんでもするよ？」

ひのりは、それなりに覚悟が出来てゐるようだ。

「いい覚悟だわ。友達のためにには命をも賭ける。いいわねえ。じゃあ、あなたが如月セトの代わりに、生体実験用の生け贅になりなさい。まあ、手を貸しなさい」

「・・・意つと思つた。覚悟は出来る。いいよ」

ひのりはまことに腕を差し出した。るいはその手をぎゅうとつかみ、リュックサックから、緑色の液体の入つた注射器を取り出した。

「この液体はね、メタミドホスとパラチオンと青汁をよく混ぜあわせたものなのよ。これを注射して、どんな反応が出るか見るの。どう? 素敵でしょう」

「あはは・・・なんか怖いな、残酷だな。・・・つー」

ひのりが声を上げたときには、既に注射器が腕に刺さっていた。緑の液体は、ひのりの体の中に入り、代わりに注射器には真っ赤な血が入っていた。

「大丈夫よ。あの液体を取り除く薬は、卒業式が終わつたあとにあげるわ」

卒業式は2日後。それまで、緑の液体はひのりの体中をまわっている。ひのりは死への恐怖、そして自分の体の中を駆け巡る液体のせいだ、倒れこんでしまった。

「うぼつ・・・るい、セトは救われるんだよね・・・?」

「約束は守るわ。セトちゃんには手を出さない」

メタミドホスやパラチオンはかなりの有毒物質だ。このままでは、ひのりの体は何時間も持たない。

苦しそうにもがいていたひのりは、それを我慢して立ち上がり、この手を握り締めた。るいは、ひのりの行動に慌てた。

「寂しかったんだよね。構つてもらいたかったから、こうやってやつてるんだよね。ここにいてあげるから、今だけ泣いていいよ。ほら、おいで」

ひのりは、るいをそっと抱き寄せた。

「やつ、ちょっと、離しないーー私は寂しくなんかないわよーー構つてもらいたくもないわよーー」

「嘘言わない! スキンシップ、スキンシップ!」

ひのりはそう言つた後、皿をつぶり、布団へと倒れこんだ。縁の液体が効いてきたのか、ぐつたりとしていて、まるで死体のようだつた。

「私が間違つていた・・・人間の体で実験なんて、バカなことを考えるんじゃなかつた！私は、何を考えていたの・・・？最後には・・・最後には私なんかに優しくしてくれたのに！」

るいは泣いていた。小さく、音も立てずに。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい！　ああ、神よ！　どうかひのりちゃんを生き返らせて・・・！」

『よからう、汝の願い、この私がかなえて差し上げよ』

その声にるいが振り向くと、パンチョが立っていた。

『叶えてやつても良いわ。ただし、条件があるわ。もう友達を傷つけないこと。守れる？』

『守れる！　絶対守るわ！』

るいは大きく頷いた。パンチョは難しい呪文のような言葉を唱え、息を2分間ほど止めた。すると、ひのりの体が突然ぴくっと動き始め、更には立ち上がることもできた。

「あれ？　あたし、死んだはずじゃ・・・」

「ごめんね、ごめんなさい、ひのりちゃん！　つ、絶対にもう誰も傷つけはしないわっ！　つく、だから・・・」

るいは必死になつて泣きながら謝った。ひのりはるいの頭をなでた。

「あたしはるいを許すよ、ね！ よしよし、泣いた後は必ず笑いま
しょう！ はい、に ！！」

ひのりは笑つて見せた。るいも目を紅く腫らして小さく笑つた。

「よし！ みんなを起こさう！」

「ええ、そうね」

ひのりは再びセトの上に乗つた。その衝撃でセトは「何ー？」「と
言つて飛び起き、上に乗つっていたひのりは吹き飛ばされ、頭をぶつ
けた。

「ふん、ざまあみろ」

ルナは鼻で笑つた。

「なつ・・・ルナ！ あんたにもアタックするぞ！」

「何！？ 来るな！」

ルナは、ひのりと反対の方向を向いた。ひのりはルナの上に乗ろ
うとしたが、ルナに蹴飛ばされ、あえなく失敗に終わつた。

「ふん、バーカ、バーカ」

「ぎやああああああ！ 言つなー！」

「バーカ、バーカ、バーカ」

ルナはバカと連呼した。ひのりは狂つたように頭を抱えて叫んだ。
そんな中、セトは再び寝始めた。るいは、ただ笑つてみていた。
(やっぱり私は寂しかったんだ。この居場所が、欲しかったんだわ)

第17話 寂しいじと（後書き）

どうやらかなりの間更新していなかつたようですね。

申し訳ござりません！

なんとか17話田・・・まだまだ長くなつたうです。

では、また次のお話を。

第1-8話 2人だけの会話

「騒がしいですわよ？」

「・・・何かあったの」

「なんなのさ？」

他に眠っていた3人も、続々と起きだし、部屋は大騒ぎになつた。

コンコン

誰かが扉を叩く音がした。その後、扉がゆっくりと開いた。

「後1-5分ぐらいで飯だからなー、布団はあつた場所に片付けておくように。後は部屋をはいて、何人が先生のところへ来い」「はーい」

しばらく騒いでいたセト達は、先生が来てから急に静かになつた。みんなの迷惑にならないように、小声で話をしている。アオイと萌と藍は、三人で布団を持っていくことになつた。

「我らが布団を出したのだから」

「当然なのさ！」

「後は頑張つてくださいですわー！」

後に残っている仕事は、部屋をはぐ、先生の手伝いの2つだ。セトどもいは、話したいことがあるようなので、部屋をはぐことを選んだ。ひのりたちは先生の下へ向かつた。

「セトちゃん・・・ごめんなさい？ 先生の手伝いに行きたかったかしら？」

るいは不安そうな顔でうつむいた。セトは「全然？」といつよくな顔で笑つた。

「で、なんですか？ 話と言つのは」

「わ・・・私・・・ね、ひ、人を、ここに殺そうと・・・」

セトは至つて落ち着いているが、るいは慌てた様子だった。るいが慌てているのを見て、セトも「私、何かした！？」と慌て出した。

「まあまあ、落ち着きたまえ。そなた、人を殺そうとしたとな」セトは、名探偵気取りの口調で、るいに尋ねた。るいはうつむいたままだ。

「誰をかね？ その問題には私もかかわっているのかい？」

セトの問いに、るいは聞き取れないくらい小さな声で答えた。セトは何度も聞き返したが、るいは声の音量を上げようとしない。

「ねえ、るいちゃん。私の声が聞こえますか？ 怯えないで・・・どうか私の顔を見てください。私は何にもしないですよ？ お願ひだから、私の声を聞いてください」

優しく、そつと自分の手をるいのほっぺたにあて、咳いた。るいも、少しだけ顔をセトに向かた。その日は既に輝きを失っていた。

「無理よ・・・セトちゃんに、あわせる顔がないのー。はつきり言うとね、私はあなたを殺そうとしていたの・・・『ごめんなさい』、『ごめんなさい』、『ごめんなさい』・・・」

セトは、その事実を知つても、動搖一つせずにじるいを抱きしめた。「殺そうとしていた、でしょう？ ならいいよ。殺した、じゃないから。私を殺す前に、きっと何かに気づけたんです。だから、あなたは人殺しではないのです」

じーっと笑うと、そうじ用具入れからほうつきを取り出し、今まで使っていた部屋をはきはじめた。

「でもう、ひのりちゃんに・・・」

「これ以上は言わなくて良いです。・・・これ以上言うと、傷つくのはあなたですよ」

セトは、ぬいこむづきを手渡した。

「わあ、せーじー。」

セトは、やけに張り切つている。理由は、早く終わらせたい飯が食べたいからだ。その様子を見るいも、涙をぬぐい、はき始めた。リーフとパンチョも、小さな布切れで壁を拭いていた。

しばらく経ち、アオイたちやひのりたちのグループが帰ってきた。
「そろそろご飯だつてー」

ひのりはルナを連れて、スキップしながら食堂へ向かった。アオイと萌と藍も、話しながら食堂へ向かった。セトといは、道具の後始末をしてから食堂へ向かった。

『セトちゃん、るいちゃん、行つていいですか?』

『るい、置いていくわよ』

セトはリーフに、

「いいよ」

と言つたが、るいは、

「守護霊のくせに態度がでかいわよ！ ちょっと待つてなさい！」
と言つた。

『やだ』

るいはパンチョにきつぱりと言われ、そうじ用具をセトに手渡して、パンチョを追いかけた。

『守護霊はあんたを守つてやつてんのよ？ ほら、頭が高いわ』
「私がいないと、あんたはいなかつたのよ！ あんたこそ頭が高い！」

追いかけながら食堂に向かう2人。セトはリーフと、そうじ用具

を片付けてから、急いで食堂に向かった。

第1-8話 2人だけの会話（後書き）

こんにちは！ 作者です。

いつものように更新遅いですね・・・。

反省します！ 本当です！

頑張つて書いていくので、見捨てないでください（え

食堂からは、いい匂いが漂っていた。今日のメニューはカレーだった。

「いえ～い！ カレーだ～！ やつた、やつた！」

セトは、幼い子供のように無邪氣にはしゃいでいる。ひのりたちは、セトが落ち着くまで待つた。

「お～い、セト！ はしゃいでるとカレーっぽすよ？ おかわりはたくさんあるからさ！」

そう言っているひのりもはしゃいでいる。ルナは「人のこと、言えないだろ？」と、呟いた。

セトたちは並び、カレーを取りに行つた。

「おお～、おいしそ～！」

カレーは出来立てで、湯気が立つていた。セトは前のぼりに並んだので、すぐにもらうことが出来た。セトは急いで席につき、一口味見をした。

「セト！ まざいつて」

「んーん、何を言つ！ おいしーよ」

「そういうことじゃないよー。」

ひのりは呆れた顔をしている。セトはもう一口味見をした後、ぶすっとした顔でスプーンをおき、クラス全員がそろいつのを待つた。

「まったく・・・何一人で食つてんだか」

ひのりが呆れた顔で呟いた。その言葉を聞いて、セトは威張つて答えた。

「何を言つー！ これは毒味なのじゅ」

「威張つて言つたなー！ 単なるつまみ食いじゃない！」
ひのりはセトにツッコミをした。セトは「愉快じやの～」と笑つた。

クラス全員がそろい、いただきますの声が食堂に響いた。その声が響く前に、セトのカレーは3分の1程度しか残つていなかつた。

「毒見サイコー！」

「セトちゃん・・・」

とりあえずセトをみんなで注意したが、セトは「毒見です」と繰り返し、聞こえとしなかつた。るいが先生に言おうとしたが、ルナが止めた。

「こうして無邪氣にしていられるのも、もう少しだけだ。だから、このままにおいてしてやれ」

るいには、ルナが何を言つているのかが分からなかつた。ルナは視線をセトに戻し、微笑んだ。

「うわーい！ おかわりしてくるねー！」

「速つ！ 待つてセト〜、あたしも行くから！」

ひのりは急いでカレーを口に含み、飲み込んだ。そしてセトの後に並び、カレーを大盛りにしてもらつた。最も、セトのほうが大盛りだったが。

ふとひのりは立ち止まり、カレーを見つめた。

「じゃがいも、にんじん、たまねぎ・・・全てのカレーの材料。ううん、カレーの材料だけに限らない。全ては豊かな自然がなければ成立しなかったのだ！だよね？」セト

ひのりが目を輝かせて振り向くと、そこにセトの姿はなかつた。セトは既に席に座り、2杯目のカレーを完食しようとしていた。

「へ？なんか言いました？」

「いや、いいっす・・・（なんか・・・恥ずかしい！）」

セトはひのりの言葉をまったく聞いていなかつたようだ。ひのりは顔を赤くして席についた。セトは再びカレーをおかわりしに行つた。

「前々から気になつてたんだけどさ、魔法つてどんなの？」

突然ひのりがみんなに尋ねた。セトどるいとルナは顔を見合わせ、頭を傾けた。

『1部は残酷』

『1部は人殺し！』

『1部はいらないわ』

『1部はこの世に必要ねえな』

守護霊は次々に真剣な顔で話した。ルナは守護霊たちが必ず言つ、「1部は」と言う言葉に、どこか引っかかつた。ルナだけでなく、アクアとアオイも引っかかつっていた。

『聖界せいかいに行けば分かるさ、1部だけの意味が。その言葉、引っかかるつてんだろう？ルナ』

ルナを睨みつけ、少しだけ微笑んだ。

「そんな時がくるのか？」

ルナは急に不安になつた。いつか、得体も知れない場所、聖界と言つ場所に行かなければならないのか。とてつもない不安に襲われた。

『もちろんだ。まさか、オレ様だけ行かせよつと想つなよ?』

「いつだ!」

『今』

第1-9話『1部』(後書き)

「んにちは。おひやしじぶりです。

ほんつと、意味不明な駄文ですみません！

これからも更新頑張ります。

第20話 大地震

『嘘だよ。まあ・・・いつかは行くときがくる』

ノアは小さなスプーンをどこからか取り出し、ルナのカレーを黙つて食べ始めた。その姿は、どこか寂しそうで、哀しそうだった。

『おい、ルナ！ カレーのおかわりをもつてこい』

小さな体で、大きな皿を持ち上げた。ルナは心の中で、ハイハイと笑つた。ノアをよく見ると、口の周りにカレーがついている。

ルナはパンチョに頼んだ。

「パンチョ、ノアの口を拭いてやれ」

突然指名されたパンチョは、しぶしぶティッシュを小さく千切つた。

『何で私が・・・まあいいわ、拭いてあげるからこっちに来なさい！』

『結構だ』

ノアは洋服でカレーを拭いた。今度は服にカレーがついた。

『あーあー、何やつてんのよ！ 面倒よ！』

パンチョはノアを叱つた。そして、ノアのもとへ飛んでいき、ノアの服をふいた。ノアは顔を赤くしながら、その様子を見つめた。

『オレ様は、んなガキじゃねえ！』

あくまでも抵抗しようとするノアに怒つたのか、パンチョは魔法を唱えた。

『うるさいっ！ ちょっと黙つてもらうわ。ジャンク・ドール！ パンチョが叫ぶと同時に、目や足、手などが取れた人形が3体、ノアの周りを囲んだ。その人形に押さえつけられ、ノアは動けなくなつた。

『まつたく・・・服をちょっと拭くつてだけで大騒ぎね』

『そういうながらもにっこり笑い、カレーをふき取った。

『ごほつごほつ、パ、ンチヨツ、自由にしろ、』

人形たちの押さえつけ行為は、だんだんエスカレートしていった。

ノアの首を締めたり、手錠をかけようとしていた。

『どうも』苦労様。もう戻つていいわよ、人形達』

パンチヨが緑のマントを取り出し、広げると、人形達はその中に吸い込まれるようにして消えていった。パンチヨはマントをしまった。

『素直に拭かせてくれれば、苦しくなかつたのに』

そう小さく咳き、にこりと笑つた。

そのとたん、地面が大きく左右にゆれた。かなり大きな地震のようだ。食堂中は大パニックになった。泣き崩れる人、大声で叫ぶ人などが多く見られた。

「じじじ地震なの！？」

「怖いんですか？ひのりちゃん」

「ここここ怖くないよ！」

「声が震えてるぞ」

1分、2分と経ち、地震はおさまるよつに思えたが、何分経つてもおさまらなかつた。それどころか、より揺れは大きくなるばかり。「嫌だ〜、やつぱ怖いよー！ 助けてーセト〜、るい〜！」
「もう少しで・・・おさまるわ」
るいはひのりを落ち着かせた。ひのりは泣き始めた。

ガシャンと大きな音をたて、窓ガラスが割れた。幸い、その近くにいた者はいなく、けが人も出なかつた。他の窓ガラスも、次々に割れていく。

「リーチャン、これはどういうことなんですか！？」

『私にもさっぱりなんです！ 聖界せいかいに関係があるかもなんで、行つてきます！』

「頼みましたよ、リーフ」

リーフは白いマントをポケットから取り出し、そのマントを自分にかぶせた。何秒か経つと、いつのまにかリーフの姿は消えていた。

「・・・このマントはどうなつてているのでしょうか？」

セトは、地面が揺れているなか、しゃがんでマントを調べた。しかし、何も起こらなかつた。

「まだ、おさまらないです」

「もう10分ぐらいこのままね・・・」

「ち、地球がおかしいっ！」

「いいや、地震が起つてているのはこの地域だけらしい」

4人はなぜなのか、と考え込んだ。

第20話 大地震（後書き）

みなさま、こんばんは。

いや～、地震って怖いですね！ しかも大地震。

実際、大地震を体験したことないんで分からぬんですけど・・・

では、また。

第21話 いた、聖界へ

『大変ですーっ！ せつせつ、せいがい聖界があーっ！』

マントの中から、傷だらけのリーフが飛び出してきた。洋服はボロボロで、小指の爪より上は千切れ、無くなっている。顔には無数の傷があり、そこから血が絶えることなく流れている。

「ど、どうしたんですか？ その傷・・・」

『今はそれどころじゃないんです！ ある地域では日照り、噴火、大火災、地割れで、もうひとつのある地域では大雨、土石流、洪水、土砂崩れ！ 最終的には、島が二つに割れて・・・』

リーフは、かなり慌てているようすだった。痛々しい傷などには目をむけず、必死に聖界の状況を伝えようとしている。

「おちついで・・・いられない状況のようですね。島が二つに割れた上、異常気象・・・」

『みんなっ、聖界に来て欲しいのです！ 聖界を救ってください！』

地震はようやく止まり、みんなのパニックはおさまった。しかし、まだ聖界では異常気象が続いている。早く聖界に行き、異常気象を止めなければ、また何度も地震が起こる可能性がある。

「リーチャン、私行きます」

「私も行く」

「あたしだって行く！」

「ボクも行くのさ」

「わ、私は・・・」

みんなが真剣な顔をして聖界に行こうとしている中、るいは行くのをためらっていた。

『クローンでもおいていけば、先生にばれないじゃない？ もちろん、時間はみんなが学園に戻ったころに止めるわよ、安心なさい』
「ありがとう、パンチョ。わかつたわ、私も行く」
しばらく悩んでいたるいも、引き受けた。

『魔導なしではあの世界は危険です。あなた達に魔導力を与えます』
「・・・お願ひします、リーチャン」

リーフはセトの前に立ち、手のひらと手の甲をセトの胸の前で合わせ、目を瞑つた。すると、リーフの手から真っ白な光が出現した。それを掴み、優しくセトの胸の中に押し込んだ。

「わあ・・・ありがとう、リーチャン！」

『いえいえ。じゃあ残りの人ならんでくださいね』

リーフは残りの人も順々に魔導力の塊を押し込んだ。

『アオイ・・・ボクたちはここに残るつ』

『そうほうがいいね。いつてらつしゃい、みんな』

アオイとアクアはこの世界に残り、しばらくのあいだ地震の様子を見ることにした。そして、また地震が起こつたらすぐ伝えられるように、リーフに通信機を渡された。

『私はルナさんとノア、そしてセトちゃんと日照りのほうへ向かいます。残りの人は、大雨のほうへ向かってください。通信機をお渡

しいたします』

リーフはパンチョに通信機を渡した。その後、握手を交わした。

『みなさん、無事を祈ります』

『そつちこそ、生きて帰つてね』

二人は礼をして、握手の手を離した。リーフとパンチョはそれぞれマントを取り出し、広げて床に置いた。声をそろえて1、2、3と数え、マントをめくると、白いつむじのようなものが出来ていた。

「ひのりちゃん、るこちゃん、また会いましょうね？」

「もちろんだよ！」

「絶対よ！ 約束するわ」

「生きて帰る、それが守らなければならない約束だ」「生きて帰ると言つ約束をし、それぞれ別のつむじに入った。互いの無事を祈りながら

セトたちはつむじの中を彷徨つっていた。つむじの中は意外に広かつたが、凍えるように寒かった。周りを見回しても何もなく、ただ白いだけだった。

「さつむいですね～、ルナちゃん

「寒いな・・・。ノア、セトにぴったりのジャンパーでも出してやれ

『了解』

ルナは、セトが鼻水をたらし、震えているのを見て心配になつたようだ。ノアは手のひらで光の塊を作り、そこからジャンパーを作

り出した。

『言つておくが、寒いのはこの通路だけだからな。ここを通り抜けたらこれは消滅する』

自分で作り出したジャンパーを指差した。

「ありがとうございます。・・・あつたかい！」

『ほら、お前の分もあるんだぜ？ ルナ』

「わ、私はいい。もうつくからな」

ルナが指差した先に、一筋の光が見えた。

第21話 これ、聖界へ（後書き）

結構 はやく更新できた・・・かな?

こんにちば、読者様。

いつも読んでいただき、まことにありがとうございます。

早いもので、もう21話でござります。

では、また次回。

第22話 魔導力

第1グループ

光が見え、セトたちがつむじから飛び降りると、つむじは消滅した。

聖界は大変なことになっていた。火山は噴火し、溶岩が流れている。地面に亀裂が入っている。街中では、家が燃えさかっていた。パンチョたちから連絡が入った。

『もしもし、リーフかしら。聖界に着いたわ。洪水と土石流で人が流されて、土砂崩れで人が埋まつてて、大雨で、大変なのよ』
『こちらリーフ。こっちも大変です、地割れ、火山の噴火、火災、日照りの被害がでています。引き続き調査をお願いいたします、では

リーフは通信機を切り、火山のあたりを見つめた。

『まずはあの火山、黒炎山に行きましょう。溶岩を何とかしないと、人々は溶けます』

『そうだな。よし、行くぞ』

リーフとノアが先頭を切って、飛んで黒炎山に向かおうとしていた。しかし、セトとルナは空が飛べないので困惑していた。

『ああ、飛べないんでしたね。出したいものを想像し、息を止め、目を瞑つて手に力をこめてください。このとき、集中することです』ルナは言われたとおり、息を止め目を瞑り、手に力をこめ、集中した。

10秒もすると、丈夫そうな黒い雲が目の前に現れた。それに触つて見ると、なんとなく硬かつた。

「乗れるのか？」

『ええ、大丈夫です』

恐る恐る雲に乗った。すると、突き抜ける」となく乗ることなどができた。

『セトちゃんもやってみてください』

「う、うん」

セトもルナのやつたようにした。

3分もして、セトの息が限界に近くなつた、目の前に大きめの青いたこが現れた。そのたこは、セトをじつと睨みつけている。

「！」こんなのに乗れるのですか？」

『早くしろ、おいていくぜ？』

セトは、おいていかれるのは嫌なので、急いでそのたこにのつた。ところが、そのたこは暴れだし、セトに墨をはきかけた。

「ぎゃ――！」

一人で地上に取り残されたセトは叫んだ。しかし、すぐ後ろからは溶岩がきているので、リーフたちは助けたくても助けることは出来ない。

「目が・・・見えない。ええい、たこー、早く行くんだ！」

たこは一向に動こうとはしない。セトは後ろから溶岩がきていることに、目が見えないせいか全く気がついていないようだ。

「セト！ 後ろから溶岩がきてるぞー！」

「な、なにいつ！？ お願ひします、たこさん！ 私を乗せてくださいー！」

必死になつてたこにお願いするセト。すでに、溶岩はセトの足元に迫っている。セトも、そのことによつやく気がついたようだ。するとたこは少しだけ動いた。溶岩にセトの足がついた、白いスキーが黒くなつた。

「あひい！！　お願いします！」

急いでたこに飛び乗った。するとたこはもつ一歩で墨を吐き、空中に浮いた。そして、ゆっくりとルナたちのもとへ向かった。

『セトちゃん！　やけどしてませんか？』

「そのうち治るよ」

『いいやだめだ。特別に、このオレ様が治療してやるわ』

ノアが、背中に隠し持っていたナイフと包帯を取り出した。セトはお願いしますと頼み、足を出した。スニーカーはすでに溶けている、足の小指は溶けかけている。

『いって・・・』

『少し我慢しろ』

ノアは器用にナイフと包帯を使い、セトの傷を治している

と、思つたが・・・

「別に、足全部を巻かなくても・・・それにゆるゆるです」

『も、文句は無しだ！』

ノアは器用とはいえないなかつた。ルナとリーフは、それを見て呆れた。

『傷口は針と糸で見事に塞がつてゐるがな・・・そのとき、セトは痛

「そうだつたぞ？」

『包帯がゆるすざるのです！ もつとじめやうひつひと。』

『麻醉はかけてないから痛いのは当たり前なんだ、ルナ！ それとリーフ！ ぎゅっとやると痛いと思つてなあ？』

『ただ単にめんどくさいだけだろ』

ルナに図星をつかれ、ぎくつとしたノア。そしてふざけながらの言い争いが始まった。そのあいだにリーフはセットの包帯を直していく。

『おーい、リーフ？ 忙しいとこねじめん』

アクアからの連絡が入った。声は震えている。

『何か、ありましたか？』

『また地震だよ！ もう20分はしごだ。おせまらない』

『そうですか・・・。こちらは負傷者が一人です。しかし、たいした問題はないです。引き続き待機をお願いいたします』

通信機を切り、リーフは複雑な表情になった。

第22話 魔導力（後書き）

結構早めの更新です！

溶岩の被害にあつたことがないので、表現とかがイマイチ分からないんですが・・・へんてこなところがあつたらご指摘ください。

たこは、海の中にいるたこです。

追記：更新が遅くなります。ご承知ください。

第23話 アオイの歌

『スニーカーはもう使えませんね。この世界では、人間界の服装は変でしょう。いつそのこと、全て着替えてしまいましょう。2番目はルナちゃんですね』

リーフは息を止め、田を瞑つて手に力をこめた。2分もすると、セトの服が大幅に変わった。

髪の色は前のままなのだが、ハンチングをかぶり、後ろでおだんごしばりをしている。服は白のロングコートで、手首の部分に黒いラインが2本ある。

ロングコートの下に少しだけ見えるのは、黒い服と黒いジャージ。手には、白く輝く長いステイック。その先はサッカーボールが入るぐらいのわっかになっていて、その中に1本白い棒が、横に貫くよう刺さっている。

靴は黒いスニーカーだった。

「白黒ですね」

『そう・・・です。でも、とてもお似合いですよ』

セトはリーフに褒められ、頭をかきながら礼を言った。

ルナの格好は、髪を二つにしばり、ロングコートだった。ロングコートの色は黒。ロングコートの下は濃い緑の服だった。

ルナの手にはステイックではなく、剣士が持つような銀色の長い剣があった。その剣に日光があたり、ぎらぎら光っている。

『ルナさんもお似合いです』

ルナもリーフに頭を下げた。その後、もくもくと煙の上がる火山を見つめた。

現代

『また地震・・・もう床が抜けてるね』

現代では、頻繁に起こる地震のせいで床が抜け、天上も剥がれ落ちている。地震がくるたび連絡しなければならないので、大変だ。

『もしもしリーフ？ 今の状況を言うね。床が抜けて天上もはがれてる。人々は大パニックだ。引き続き、がんばってね！ ジャあ』 急いで通信機を切り、地震が収まるまで抱き合って待った。この地震で倒れたり崩れたりしない、この建物はかなり丈夫である。

「早く、早く帰つてくるのさ、みんな」

『今は信じて待つているだけだよ』

アオイは、アクアになだめられ、静かに座り込んでいた。しかし、地震が止まることはない。そのことよりも、みんなのパニック状態が気になつていてアオイ。

「きやー、きやー！」

「もう、地球が終わつてしまつよ」

他の学校の者は、生きる希望と地球の明日をあきらめ、田が死んでいる。萌と藍も黙つて、地震がおさまるのを待つていてる。

「てめえら騒ぐな、殺すぞ」

一人の少年が、怖い目で目が死んでいる人をにらんだ。その少年は、のりおだつた。

「の、のりおくん！？」

『どうも、のりおくん。ボクもこのまま見てるわけにはいけないね。さあ、少しでも元気になつてもらおう。それがボクたちの使命だよ』

アクアは、目が死んでいる人々の前に立ち、一つ礼をした。これから何が始まるうとするのか、他の者には何一つ分からなかつた。地震が起こつてゐる中、時折バランスを崩したりしたもの、きちんと前を向き、息を大きく吸つた。高く飛び上がり、空中で2回転をした。

『みんなが地震を止めようと頑張つている。そのなかでボクらはただ待つてはいるだけでいいのだろうか。いまこそ力をあわせ、戦うときだ。ボクに、どうか力を貸してください』

アクアが言い終えると、あちこちで喝采が起つた。

「俺たちは、何をすればいいんだ？」

『ボクはこれから、災害の威力を少しでも小さくする魔術を使う。その後ろで踊つていて欲しいんだ』

アクアの言葉に、人々は迷うものもいたが、大半は頷いた。早速、人々は準備についた。アクアは先頭にたち、斧の先端のほうを下に置いた。

『不格好でもいい、楽しく踊るんだ。愉快に、爽快に。さあ、踊つてくれ！』

「いくよー、せえのつ！」

失わないで 無邪氣さと生きる希望

大切な者を 守りたいのならば

愛想笑いなんか 必要ないんだ

なんにも考えずに 心から笑うんだ

大切な者は いつだつて傍にいてくれるから

いい調子でアオイが歌い始めた。それにあわせて他の者も、飛び跳ねたり回転したりして踊っている。アクアも斧で波動を作り、それを地面に叩きつけた。5分、10分と経ち、地震の威力は半分ほどにおさまった。

『ありがとう、みんな。地震の威力を半分に出来た。これ以上出来ることは、他の者を信じること。まだ仲間が頑張ってるんだ。信じて待つていよう』

人々は、アクアの言葉を聞いたあと、倒れこんだ。

第23話 アオイの歌（後書き）

更新が遅くなりました。お久しぶりです。

ここのシーンを書くのは、結構楽しかったです。これからもっと出していくと思います。

では、またお会いしましょ~!

第24話 パンクの登場、パンチョの想い

第二グループ

ひのりたちは、洪水の地を手探し、歩いていた。大雨の中、この地帶では洪水が起きていた。

すでにひのりとひのりは着替えていた。

ひのりはピンクのロングコートを着ていて、ひじまではあるだろう、綺麗で透き通った赤い手袋をしている。更に、薄いピンクのチヨーカーを首に巻いている。

手にははにわらしきものがあった。靴はピンクのブーツだ。

一方あるいは、新緑色のロングコートで、小指に緑色に光る（恐らくエメラルドの）指輪をはめていた。背中には、長い黄緑の翼が輝いていた。靴は緑色のヒールだ。

『まずは、住民を避難させるよー。パンチョ、よろしくね』

『ええ、任せて。私の愛しいジャンク・ドールたち、みんなを避難させてあげて』

るこにはマントを広げ、前のようにガラクタの人形をだした。3体ほどの人形たちは、突然大きくなり、狂ったように叫んでいる人々のもとへ向かつた。

「あの人形に任せておけばいいのね？」

『まあね。まあ、大雨を止めへ行こうかしら』

『ひのりちゃん、はにわを持つてー』

言われたとおり、ひのりはにわを持った。ひのりとサンは、時

各自を合わせ合図をし、2人で一つのはにわを握った。すると、はにわが光りだした。

「サンツ、はにわが熱い」

『もうちょっと、我慢だよ』

今まで大雨だった空は、少しずつ晴れ始めた。

その時だった。

再び空が曇り始め、先ほどよりも空は黒くなり、雷が鳴りはじめた。その雷はるいをめがけて落ちてきた。るいは間一髪でよけた。

「危ないわね！　きっと誰かが仕組んだに違いないわ」
るいの勘は的中していた。奥のほうから、黒いタキシード、黒い帽子をかぶった男が現れた。再び雷がるいめがけて落ち、るいは直撃してしまった。

「きやあああああ！」

「るい！？　しつかりしてええ！」

『るいちゃん……！』

『誰よ！　誰よ、るいちゃんを殺したのはあー！』

るいはぐったりして、ぴくりとも動かない。体はところどころ裂けたり、ちぎれたりしている。首の横のほうは、流血している。4人は立ち止まつた。

「フフフフ……人間どもよ、私はゴゴウ。よく覚えておけ。恐らくその少女は死んではないと思うね。何しに人間を連れてここに来たんだね？」

「サンとパンチョは、何らかの理由でゴゴウの事を知っている」

と呟つことが、ひのりには感じ取れた。ひのりはるいをおぶり、後ろに下がった。

「どうしたのだ、いつものもう2人の姿が見えんが？ 別行動かね。少しばかり、答えたらいどうなのだ、守護霊どもよ」

『せつかくだから、今は死にかけている素敵な人間が付けてくれた名前を教えてあげる。私はパンチョよ。』こつちはサンよ』

サンは頷いた。その後、ひのりにもつと下がるよつ命じた。

「そつか、サン、パンチョ……私にとつてはどうでも良いがね。私はお前らを殺したり傷つけたりするだけで楽しいのだが」

『ハウは、人を殺したりするのを楽しんでいるよつだつた。そのとき、パンチョのドールが戻ってきた。ハウは、それを逃さなかつた。

「こいつらは目障りだね、消えてもらおつ」

『ま、さか……やつ、やめてつ…』

パンチョが何か、悪い予感を感じ取つた。その予感は見事にも当たつてしまつた。

『ハウが手をサツとあげると、再び雷が鳴りはじめた。パンチョのドールたちに、先ほどのいが当たつた雷よりももつと激しい雷が落ちた。

ドールは、真つ黒焦げになり、

『ゴゲゲゲゲゲ！』

と嘆きをあげていた。パンチョの目から大粒の涙が零れた。

『……また、あの時のようにになつてしまつたわ』

パンチヨたちがまだ聖界にいた頃、ゴゴウは今のよつた災害を引き起こした。

ある晴れた日、突然島が一つに分かれた。ゴゴウのせいだ。

ゴゴウの雷は、今よりももっと強力で、島を真つ一つに分けることが出来るほどだった。ゴゴウは部下を従えて、大雨と日照りなどの災害を引き起こすよう命じた。

あの時もパンチヨのドールが犠牲になってしまったのだ。

たまたま後ろからやって来たドールたちを、ゴゴウは雷で殺したのだ。パンチヨは、いつもいっしょに遊んだりしていたドールが目の前で死ぬ姿に、恐怖を覚えたのだった。

その姿を見て、ゴゴウは笑っていた。面白い生き物でも見ているかのように。

「だからなんだと言うのだ。もう一度あの戦いをしてもいいのだがね」

『その前に私があなたを退治する』

「それはいい。が、残念だが、私はもう2人のもとへ行く。また会えたら、戦つてもいい。では」

ゴゴウは大きな黒い翼を広げ、暗黒に染まつた空に消えていった。

第24話 パワウの登場、パンチヨの想い（後書き）

こんには、作者です。

ロングコートと書いてもしつくじ来ない方へ

ひぐらしのなく頃にで言えばレナのきぐるやつ。

遊戯王で言えば、海馬瀬人の着ているもの。

みたいな？ です。

よくわからなかつたら、「めんなさい。」では。

第25話 たこ意外なこと（前書き）

2話も間を空けると、話が分からなくなってしまいそつなので、第1グループのあらすじを書きます。混乱をせてしまい、申し訳ございません。

リーフ、セト、ノア、ルナの4人は聖界へたどり着いた。まずは黒炎山へ向かうこととした。しかし、ルナとセトは飛ぶことは出来ない。

そこで、魔導力を初めて使い、とべるもの出すことになった。ルナはうまく成功したが、セトはうまくいかない。ようやくたこを出すものの、飛び立たない。

溶岩で足を焦がしてしまったが、ノアの手当てで治る。

アクアから連絡が入り、人間界にも異変が起きていることを知る

第25話 たこ意外なこと

第1グループ

あたりは暗くなっているはずだった。本当ならば今は深夜〇時過ぎ。本当の人間界では、月が出ていて、星が輝いていて、涼しくて

しかし、このあたりは違うのだった。相変わらず太陽はジリジリ照りつけるし、不思議なことに眠気もなかつた。4人もこの暑さで息が切れてきた。

「暑い、です〜」

『黒炎山付近だからです〜。はあ、暑い〜』

「あ〜。たこが〜！」

セトが乗っていたたこは、真っ赤になつてよれよれになり、しおれている。仕方なく、ノアはじょうろを出し、たこにかけてやつた。「ふしゅー！」

「わあつ！？」

たこはいつものように、セトに墨をかけた。再び水を上げると、たこはますます赤くなり、しわしわになつている。セトは怒つて、「せつかく水を上げてるのに！ 火でも出しちゃえ」といった。

しかしセトは、火の出し方だけでなく、魔導力の使い方さえ知らなかつたので、どうすることも出来なかつた。戸惑うセトに、リーフが優しく教えた。

『そのステイックの前の部分を、たこに向けてください。頭の中で、魔導力を使う様子を思い浮かべてください。目を瞑り、力を抜いて

ください! ステイツクが熱くなつたら、完了です』

セトは言われたとおりにした。しかし、待つても待つてもステイツクが熱くならない。そんな様子に呆れたのか、リーフは火を出してやった。

「ありがとうございます。たしかにやつて下さい」とい

止めたほうが良いと思いますが、

咳きながらも、リーフはたこに火をつけた。ところがたこは熱かるどころか、喜んでいる。どうやらこのたこは、火が好きなようだ。

『たこ』は普通、水が好きだった気がするんですが

「そう、ですね。て言うか、空を飛べる自体おかしいです」

セトとリーフが呆れている中、ルナとノアは青く染まつた空を見つめていた。黒い物体がこっちに近づいたように見えたからだつた。

「上？」

セトが見上げたときには、黒い物体はセトの真上にあつた。そう、黒い物体は「ゴカ」だった。「ゴカ」はセナの上に着地した。

一 ほほほほほほ、久しぶりだな、
守護霊共よ！」

「いや、セトのことなど気にせず、平気で話している。腕を組み高らかに笑った。うつぶせ状態のセトは、しばらくじっとしていたが、我慢が出来ず、ゴゴウの足を掴んだ。

いたいです！

「ウタガニ」

セトは立ち上がりうつと/orするものの、ゴゴウが腰に乗っているため、立つに立てなかつた。ゴゴウはその様子を見て、小さく笑つた。

『オレ様はノア。こつちはリーフだ。お前が何の用だ、ゴゴウ。パンチヨには会ったのか?』

「会った。一人負傷者がいるようだね。しかしも一人負傷者を出さうかね」

ゴーヴは上に手を伸ばした。雲一つない晴天の中で、雷を起こそうとこうのだろうか。

『セトちゃん！ 危ない！』

危険を察し、リーフが叫んだ。しかし、セトは身動きすら取れない。3人はセトを助けようと向かおうとした。何故か動けない。金縛りのようなもので、動けなくなっている。

「雷は無理だが、炎ならばこいつでもお前に引かれれる。まあ、喰らうがいい！」

ゴーヴはセトを金縛り状態にして、退いた。セトは死を覚悟した。（私は、6年生にならないで死んじゃうのかな……）

真っ赤な炎が、勢いよくセトに近づく。セトはじつと目を瞑り、体が溶けるのを待った。

炎がセトに届くことはなかった。セトが乗っていたたこが、セトの盾となつて攻撃を防いでいる。むしろ、炎を浴びて元気になつているようだつた。

『しゅーふしゅー！』

「こ、の私が、たこ如きに攻撃を防がれると！」

たこは墨を吐いて、炎を跳ね返した。ゴーヴはその場から離れ、立ち去つた。

「ありがとう、たこちゃん。たまには役に立つじゃないかー」

『しゅーしゅー！』

たこは墨をセトに吐き、わざわざだ。

第25話 たこ意外なこと（後書き）

「このたこ」は炎が好きなようですね。みなさん、いっぱいあげましょ！
！（え

「こんにちは。前までは、更新が遅くなりました。

お話をうかがって、やつぱり楽しめます！ わーいわーい！

では、頭が狂ってしまったようなので、また。

第26話 黒い月（前書き）

現代グループのあらすじ

聖界でおこっている異変が、現代でも違つ形で起こった。

震度6以上という地震が長い間続いているので、人は恐怖に震えていた。

そんな時、のりおがみんなを静めるため、少し乱暴な言葉を言ひ。そのおかげで、アオイとアクアが魔法を使い、地震の威力を半減させた。

現代

夜中。地震の被害は弱くなつたものの、まだ揺れはある。油断は出来ないので、アオイとアクアは目をこすりながら起きていた。
『今までの地震は……震度3ぐらいかな。ちょっと気分転換行ってくるね』

アクアはアオイにこの場を任せ、ベランダに出た。
風は涼しく、時折強く吹いていた。木々が揺れ、街中では街灯がついているところもあつた。ここまで風景ならば、いつものように見ていた。おかしいとは思わなかつた。
ただ一つ、いつもとは違つところがあつた。

『月が黒い』

形ははつきりせず、満月なのか三日月なのか新月なのかも分からなかつた。アクアの記憶によると、昨日は三日月だったらしいのだ。だとすると、新月はありえない。

アクアは考えた。雲が出ているわけでもない、新月でもないと。

『世界が異常になつていて……気がする』

円さえ見なければ、他はいつものような風景だつた。月を見ないよつにしようとしても、どうしてもそこに意識がいつてしまつ。
『ボクは、この地球を救いたい。暗黒に染まつた月じゃなくて、金色に輝く、綺麗な月が見たい。ね、ボクが救う。約束する』
呟くアクア。その声は小さく、他の誰にも聞かれていないようだつた（最も、アクアの姿はアオイにしか見えていないが）。

アクアは、自身の透明な体を見つめ、部屋に入った。以前より、

透明さが増したように思えた。

「アクア……独り言?」

『ん? ああ、うん。気にしないで』

世界がおかしいんじゃない、ボクがおかしいのか否か

アクアはアオイの体に戻るのではなく、アオイの横にちょこっと座つた。アクアは、アオイに相談した。

『アオイ……外でね、月が黒かつたんだ!』

「新月じゃなくて?」

『ううん、違うの! 昨日は綺麗な三日月だつたし! でね、見て? ボクの体、透明になつていってるでしょ? きっともつすべ、消えちゃうか

「変なこといわないで欲しい。希望を持つて欲しいのぞ」

アオイは真剣だった。黄色い瞳には、涙がたまっていた。時折涙を零しそうになるが、じつといらえ、アクアを見つめている。

『「」、「」めん』

「わかれればいいのさ」

場が険悪な雰囲気になつた。1分、5分、10分と沈黙が続いた。

すると、アオイがずっと目にためていた涙を零した。その後、涙は絶えず零れ続けた。アオイは、唇を噛み締めたり涙を拭つたりするが、涙は絶えなかつた。

『アオイッ!? ななななな泣かないで!』

「え、あ、あれ? おかしい、な。……ボクはつ、泣きたくない、はずなのに」

アクアは困惑し、慌てた。拳句の果てに考え付いたことは、アオイを抱きしめてあげることだった。しかし、実体のない彼女は、アオイに触れられなかつた。

『ボクに体があれば……実体があれば君を抱きしめてあげられたのに』

「うう、ん。いいんだ、よ。つ、ありがとう……」

アオイの涙はまだ枯れ果てなかつたが、涙を拭いながら小さく礼をした。

アクアは、まだ黄色い姿を見せない黒い月に願った。

お月様、

どうか願いが一つかなうならば、

魔法なんていりません。ただ、

みんなと同じ体をお与えください。

これ以上何も望みません。

透明な体とちゃんと触れる体を取り替えてください。

アオイを抱きしめられる体を、ください

第26話 黒い月（後書き）

今回は短めです。

なんか、月齢とか調べるのが楽しかったです。

私、いつが満月とか新月とか分からぬんで……。

月のお話は、また書いてみたいなあつて思います（番外編とか、特別編とかで）！！

では、また！

第27話 幼女（前書き）

第2グループのあらすじ

大洪水の地をを目指して、4人は歩いていた。人々を避難させるために、パンチョはジャンク・ドールを出し、避難させた。

そんな時、「ガウと名乗る男が現れる。その男は、いきなりるいに雷を落とし、るいは倒れてしまう。そんな時、パンチョのドールが戻ってくる。ドールも、るいのようになつた。

またあのときのようになつたとパンチョは言ひ。あのとももいのような感じだつたらしいのだ。

戦おうとするパンチョをよそに、ガウはもう1グループのまづく向かつて行つた。

第2グループ

「るい……！ 死なないで、死んじゃやだよおつ！」

未だにるいは起きない。ひのりが耳元で大声で叫んでも、パンチヨが魔法をかけても、一ミリも動かない。まるで、道端で死んでいる蝉のようだつた。

「るい！ 起きないと、殺しちゃ、うつづー、ねえ、聞こえて、るんでしょ！」

ひのりは声を枯らせて泣きじやくり、はにわを構えた。はにわからは既にビームが飛びそつだつた。サンはそれを手で止めた。

『ひのりちゃん、落ち着いて。本当に殺しちゃ、余計起きないよ？ ひのりちゃんは、成功を祈つていて。あたしとパンチヨに任せてね。ああ、パンチヨ！ いっくよーう！』

『いいけど……成功率は3%ぐらいよ？ 賭けてみるしかないわ』パンチヨとサンはマントを構えた。そして5秒間ほど目を瞑り、いきなりかつ、と目を見開いた。マントがひらりと揺れた。それと同時に、マントから激しい光が発生した。あたりは黄色い光に包まれた。

「な、にこの光……！」

『お、おかしいかも！ こんなこと起つたこと、一度もなかつたよー。』

『成功確率は1%に縮んだかしら？』

サンとパンチヨの慌てよづこみると、とてもなく大変らしい。しかし、黄色い光は止まることなく、るいに向かっていく。

『あぶないつー！』

サンが叫んだときにはもう遅かつた。るいに黄色い光は直撃した。

その時だつた。

「ん……え？」

今までぐつたりしていたるいが、突然起き上がり、光はるいの顔に直撃した。

「ああああああああああああ！？」

意味不明な叫び声。るいの頬に傷が出来てしまつた。それだけで済んだ理由は、目の前に透明な物体が来たからなのだつた。

「パンチヨ……痛いじゃないの！ 何をするのよ、全くもう！」

「ち、ちがうの！ みんなね、るいのことを助けよつとしてたの！
「ごめん……」

ひのりはるいに頭を下げた。るいは首をかしげながらも、何度も頷いた。

「誰のかしげ……」「

「え？」

「私を助けてくれた透明な……その……？」「

るいはまたしても首をかしげた。透明な物体とは、ひのりたちには理解不能だつた。何のことかも分からぬ。分からぬので、ほうつておくことにした。

「うえ　　ん！！！！」

ひのりの耳元で、泣く声がした。耳を破壊するほど大きな声。特に耳元では、かなり、いや、とてつもなく大変な大きさ。

「うるや　　あい！」

「あ、「」、「ごめんなさい」！」

ぴたりと音が止んだ。先ほどまで透明だつた物体は、姿をあらわした。真っ青なドレスを纏つており、髪の後ろに藍色のリボンを結えてある。6～8歳ぐらいの女の子だつた。

「私……マイつていいます。魔導士に憧れてて、練習してたら……いきなり変なのが突つ込んで来まして……大声出して「ごめんなさい！」

マイと名乗る幼女は、泣きそつた顔で頭を下げた。

「い、いいわよ！ 守ってくれて嬉しかったわ」

「いいえ、私が悪いんです。お詫びと言つてはなんですが、私も、この世界を救いたいんです！ あなた達に、付いていかせて下さい！」

マイはこいつと笑つてゐるの服のすそを引っ張つた。るいとひのりは顔を見合させ、サンヒパンチヨもまた、顔を見合させている。

「無理だと……思う？ セトに電話して聞いてみるけど……」

ひのりは通信機を手にとり、電話をかけた。リーフがでた。

『ハイ、こちら第1グループ、リーフ。どうかなさいましたか？』

「リーフ、セトはいる？」

リーフはすぐに『ハイ』といい、セトに代わってくれた。

「もしもしー？ ひのりちゃん」

「ここに、小さい女の子がいるんだけど、連れて行つても良いかな

？』

セトは少し黙つていたが、状況が分かると、答えた。

「いいんじゃないですか？ その子に人生の厳しさと楽しさを教えてあげてください」

それだけ言って、電話は切れた。ひのりは、あまり納得がいかなかつた。せめて、両親の許可が下りてからにしよう、という考えが浮かんだ。

「そうだ、お父さんの許可を入れな

「いよいよ」

第27話 幼女（後書き）

うわあ、更新遅つ！

すみませんでした。1ヶ月以上も更新してなくて……。

どうしたら皆さんの信頼を取り戻せるか分かりません。

心から謝罪

いたします！ すいません！

第28話 マイの過去（前書き）

今回は、2話連続なんで、書かなくてもいいですかね？すみません！ めんどうなだけなんです！ 「めんなさい！」
とことことで、本編ひとつが！

第28話 マイの過去

第2グループ

「お父さんは、死にました。聞いたことがありますか？ 監禁されて、拳銃を突きつけられ、ばーん」

マイの表情が険しくなった。時折、泣きそうにもなり、るいとひのりになだめられた。

「あんな父親、死んでもよかつた！ 私に暴力ふるつて、痛めつけて、笑つてる人だから！ お母さんだつて！ 私を見捨てて、出ていったのぉおおー！」

マイが暴れ出した。マイの心の奥底から、怒り、憎しみ、孤独、死の感情が込み上げてきた。親に捨てられ、一人で生きていたこの子に、一体何を教えられるのか、ひのりには分からなかつた。

「……あたしたちと来たいの？」

「うん……」

なんだか、マイが憎らしく思えた。泣けば済む、と思つていそうなその顔は、ひのりを更に苛立たせた。マイは、暴れてはいけないが、泣いている。

「みんなはどう？」

「私たちに聞かれても……ねえ、パンチヨ？」

『ええ、任せるわ』

『ひのりちゃんに任せるとーー！』

なんて、人任せ

「どうだろ。こんな小娘、邪魔なだけじゃない？」

そう言つて、マイを睨みつけた。マイは、怯えている。

「いい？ あたしたちと来たいなら、泣くなッ！ 怯えたり、暴れ

たりするのはガキのやることなんだよッ！ 生半端な気持ちで魔導士になんかなれると思うなッ！ お前なんか連れて行くかつ

『まつ、まあまあ、おちつこ、ひのりちゃん？』

「つるつさいなあ？ あなたは任せるって言つたでしょ！」

ひのりは、マイのような人が苦手であった。年齢によつて差別され、最終的にはどんなに相手が悪くたつて、相手が有利になる。ひのりはそう思つていた。

「あたしは 断固嫌です、こんな女。いじ。るい、パンチヨ、サン」

ひのりが先頭を切り、大雨の中、進んでいった。

第1グループ

ここは火山付近。噴火しそうだが、何とか耐えているようだつた。セトは、リーフに魔導力の使い方を教わつていた。ルナとノアは、ストレッチ。

『ちつがあーう！ 心をこめて！ もう一回』

『うう、はい』

リーフは杖を軽々とまわし、決めポーズまで作つてゐる。セトの動きは、ぎくしゃくしてゐる。杖をときどき落とすし、実技のときは、魔導波がでなくなる。

『心がこもつてるのはわかるけど……右手はもう少し上を持つて。左は3分の2ぐらい。そつそつ』

『うん、こうだね？』

『ううう。じゃあ、魔導力を使ってみて下さい』

リーフは即座に的を用意した。セトは田の前の的の中心を狙つて、精神を集中した。セトの周りを白い炎が包む。

「うう……いやああああ！」

『おおつー』

セトの魔導波は、惜しくも的から外れた。的からかなりずれてしまつたものの、リーフは笑つて拍手をした。セトは汗をかきながら、必死に練習している。

『もうちょい！　1回お手本です』

「はい！」

リーフは片手に杖を持ち、軽々と魔導波を放つた。的は少し焦げた。
『努力すれば、きっと出来ます。私も馴れるには、時間がかかりました』

「ぐんと頷くセト。

また、練習を始めた。杖を持つ位置を、少しずつ変えていく。リーフも、杖を持つ位置、構え方などを、細かく教えている。

「いきますよ、リーチちゃん」

『ええ、どうぞ』

セトは力いっぱい魔導波を放つた。いくつかに分かれた波動は、曲がりくねつて的に向かつた。力強かつた波動は、的を粉々に破壊した。

「で……出来た。出来たあああ！」

『やつたじゃないですか、セトちゃん！』

的に見事当たったセトは、波動のコントロールを教えられることになった。

セトは波動を出すとき、コントロールを全く考えずに行っていた。的に当たつたのは、偶然と言つても良いらしい。この先、コントロールがうまくないと、見当はずれの方向にいつてしまう可能性も、十分ある。

といふことで、セトは修行を続ける。

第28話 マイの過去（後書き）

遅くなりました！

書くのは楽しかったんですが、のんびり書いていて……。
とにかくすみませんです。

こんな駄文でも、楽しんでくれる方がいたら何よりです。

第1グループのあらすじ

黒炎山付近到着。

セトのたこがしわしわになつてゐる。せつかく乗せてもらつた御礼に、水でも出してやつた。すると、墨を吐きかけた。怒つたセトは、火を出してやるうとした。

しかし、出し方が分からなかつた。戸惑うセトに、リーフは教えた。待つても待つても何も出なかつたのに呆れたリーフは、火を出してやつた。それをセトの命令で、たこにあてた。たこは喜んだ。

ゴーパウが空から降つてきた。真下にいたセトのことを、ふんだ。必死に立ち上がろうとしたが、重くて無理だつた。

ゴーパウは第2グループのほうに負傷者がいたことを知らせ、こっちにも負傷者を出さうとする。雷は無理だが、炎を出して攻撃してくる。

たこは盾となり、攻撃を防いだ。よほどくやしかつたのか、ゴーパウは立ち去つた。

第1グループ

セトは、リーフの指導のもと、未だに修行をしている。ルナとノアもストレッチが終わったらしく、今度は魔導の練習を始めた。

『ルナ、これだけは言わせてもらう。お前のコントロール、パワーは申し分ない。ただ、持久力をつけよ!』

「はあ、はあ……、持久、力?」

『マラソンだマラソン! ほら、行け!』

2人は、その辺をぐるぐる回り始めた。ノアは、後ろについて背中を押してあげたり、波動を放つたりし、ルナに手助けをしてやつた。

『もつと、走れるだろ?』

「私が、じきゅ、りょく、無いの……知ってる、だろ!」

『えー? 聞こえんなあ?』

「もう、おまえ死ね!」

ルナはノアに波動を放った。その結果、ノアは石に当たって気絶寸前。途切れ途切れに笑いながら呼吸をし、セトたちのほうにむかつた。

「ふう。随分がんばってるようだなあ、セト?」

「あつたりまえです! 私だけ遅れてるみたいで嫌なんで。ぜーつたに、負けませんよっ!」

「いや、」

ルナはそこで言葉を止め、目を閉じ、耳をすませた。地響きがはつきりと聞こえる。セトとリーフ、そして石に張り付いていたノアも、その異変に気がついたようだつた。

「地面がないている
？」

『いや、正確に言うと、黒炎山だ』

ノアの発言の直後、大きな爆発音が聞こえた。黒炎山から、溶岩が流れ出しているのが見えた。このままぼーっとしていると、みんなだぶつになってしまふ。

『 もういです…… みんなん、 飛びましょ うー』

ルナはすんなり雲を出し、のった。セトもたこをだし、とび上がつた。守護霊たちは何も無しで飛べるので、苦労する」とはなかつた。

『用德治』

「アーティスト」

うへん?

セトは、溶岩は一度体験したことがあるが、何度も体験しても馴れるということではなく、あついだけであった。ふと、セトはいい考えが浮かんだ。

たこに、ソーセージの溶岩を食べてもうらうつ、ヒ。

「わあ、たー。全部食べてくださいー。」

「おやじさん！ 素晴らしくてすよ！」

卷之三

た」の興奮は止まらない。あの、赤く高温の溶岩を見て、息が荒くなっている。これ全部食べていいの！？　と言わんばかりであつ

卷之三

二〇

「え……？ ちょ、ま、私を下ろしてから行ってください！」

セトの言つことも、今のたこには聞こえていない。そんな様子を見ていられなかつたルナは、セトの手を引っ張り、救助した。たこにはそんなの関係ないよつで、田を輝かせて溶岩へと進む。

「ぶしゅ……！」　しゃうううう！

たこはやけどしないのだろうか、と不安そうに思つたり、おいしそうに食べるなあ、と嬉しそうに見てみたり。まあ、簡単に言えば『どつちの思いも五分五分』であった。

（大変そつだな。ちょっと、手伝つてやるひつかな）

セトは、わすがに量が多いのかとおもい、水を出して作業を手伝おうとした。

『いいこと考えました！　溶岩を水で固めて、杖にしまつておいて、たこが食べたいときにつでもあげられるんぢやないですか！？』

「リーちゃん、その考えいい！」

早速、作業に取り掛かった。セト以外は水を溶岩へかけている。セトは、たこの保護者として溶岩をしまつておくことになった。

「これでいいだろ。セト、今から私たちが

『魔法をかけまゝす』

『この溶岩が杖に収納しているときにおつくならないよつこ、だ』だ
ルナ、ノア、そしてリーフは、変な呪文を「こによ」によつている。声が小さくて「こによ」によつているのではない。セトには理解不能だったのだ。

「……す」「」

溶岩は見る見るうちに固まつていぐ。セトは杖の先端部分を開けて、溶岩をしまいこもうとした。しかし、全くと言つても良いほど入れ方が分からなかつた。

『ああ、入れるにはですね、ん~、自分で呪文決めちゃつてください。』

「え、！」

突然に言われて、どんな呪文が思いつくだろうか。セトは全く分からなかつた。

『じゃ、時間無いので、私が決めた呪文を言つてもらいますよ』

「それは、後から変更できるんですか？」

『ええ。今は急ぎなんで。では、こう言つて下さい。』

タベタイナ オコメダイスキ タベタイナ』

その変な呪文に、しばらく思考が止まつたセト。

「な、なんなんですかっ！ そんな変な呪文は…」

『まあまあ、急いでくださいよ。はい、セーのつ…』

「う……（もうしょうがない…）タベタイナ オコメダイスキ タベタイナ…！」

すると、その変な呪文からは想像できないよつなことが起つた。溶岩がセトの杖に収まつていぐ。

『全部、入りました！ たこ、ちょっとあげる』

杖の先端部分を開けて、溶岩を少したこにかけた。たこは飛び跳ねて喜ぶ。セトはその様子を見て、私は幸せだ、と思つた。

今は。

第29話 溶岩（後書き）

遅くなりました！ すみません！

たこはこれから、重要なものになる（？）かもしれません。
期待しないで待っていてください！

では、また次のお話で。

第3の話 ひのりへマイ！ 短い戦い（前書き）

第2グループのあらすじ

お父さんは死んだと叫びマイ。お母さんも自分を見捨てて出て行ったという。また、大きな声で泣き出す。そんなマイをひのりは、「泣けばいいこと思つてこる」と想い込み、乱暴な言葉を吐き捨てる。ついには、マイをおいて雨の中を進んでしまつた。

第1グループのあらすじ

・・・はいいか。
1話前ですもんね（面倒くさいだけ）。すみません、こんなだらうで！

第30話 ひのりvsマイ！ 短い戦い

第2グループ

るいは、少し浮かない顔をしていた。本当にマイを置いてきてもよかつたのか、と。ひのりはかなり前をすんずん進んでいくし、他のみんなも、さほど気にしていないようだつた。

「ね、ねえ？ パンチョ。いいのかしら？ あの少女のこと」「はあー……人間つて、こんなに鈍かったのね。それなら気にする必要はないわ。後ろ』

パンチョは振り向かずに後ろを指差した。るいは、パンチョの言葉にむつとしながらも振り向いた。

木の陰からチラッと見えたのは、黒のような青のような、暗い系の布。少し蠢くその正体がどうしても気になつたるいは後ろに戻つて、正体を突き止めようとした。

「勝手は許さないよ、るい」

2、3歩進んだところで呼び止められた。びくっとして振り向くるい。振り向いた先には、立ち止まつてはいるがこっちを見ていいひのりがいた。

「ど、どうしてこっちを見ていらないのに様子がわかるの……？」

「んー、なんでだろうね。ま、るいには関係ないし。それよりさ」ひのりは振り向いた。その瞳には、もう既にるいは映つていなかつた。むしろ、光すら映つていなかつた。

「いつまで隠れていられるかなー、待つてみよ。ね、マイちゃん？」

「い、つから……？」

「ずっと前からだよー？ あれれれ、分からないとでも思つてたのかな？ あたしのことをなめてるんだ。……こっちにおこでよ、

ストーカーマイちゃん？」

マイは1歩木の横にずれたが、しゃがみ込んで頭を抱えた。そして、ひのりのことを鋭く睨みつけた。一方のひのりは、そんなものに怯むわけもなかつた。

「怖がらなくとも良いよ、じゅう来て。今は何にもしないよ。素直に言つこと聞いて？」

「私も連れて行ってくれたって良いじゃないですかあ」

「じゃ、そのための試験をする。そのために呼んでるんだじゃん。早く、じゅうち来いよ」

その言葉にびくびくしながらも、マイは恐る恐る立ち上がつた。

「試験ってなんですか？」

「お前を連れて行くための一。本当ほんな暇ないんだけどね、特別。それなりの能力があつたら連れてつてあげるよ？ ビリする？ ひのりは既に戦闘体勢に入っている。

マイめがけて、はにわを振りおろす準備をしている。

「やります！ 私は行きたいんです！」

マイも負けていられなくなり、杖を握りしめた。マイの杖は、杖というよりもスティックというのふさわしい。両先端部分に、紅い水晶が輝いていた。

ひのりはマイに飛び掛かつた。かなり距離があるはずなのにひのりは楽そうだった。マイは1歩遅れて構えた。ひのりははにわでマイを、力いっぱい殴りつけた。

「あ……ッが」

ひのりのもつてているはにわは、普通の土器を作る粘土で作られたのではない。どんなに呂こうが踏みつけようが、決して割れない鉱石で作られている。

「あれま、以外にあつさりだつたね？ それで終わり！？ 時間取つておいて？ ヘーえ、じゃああたしたちもういくね！？ それで

良いんでしょ、答えるマイー！」

ひのりの後に続く者はいなかつた。るいも、パンチヨも、サンも、みんな口をぱかりとあけている。マイも、手を前について跪いている。

「うつ……わ、たしもお」

先ほどの衝撃がまだ残つているのか、マイは力なく地面に突つ伏した。血が、マイの額を流れしていく。やがてその血は、マイの目に入り、頬を伝つて地面へ落ちた。

「さすがに、ここまでする必要はなかつたわ」

「るいはあたしのこと、分かつてないよ。あたしがどれだけこの子を嫌つっていたか。それに、たつた1発殴つただけ。罪悪感がないなんてことはない。あたしだつて人間だもん、罪悪感は感じる……」

ひのりは泣き出した。今まで溜まっていた自分の「悪」を、全て吐き出すかのように思い切り泣いた。大粒の涙をたくさん零した。「どうしていいか、分からな、かつたの。あたし、小さい子きらい、じやん？　とにかく、自分の意見、を、通したかつた、のー」

「わたしが、わるか、たんです」

倒れていたはずのマイが小さく口を開いた。

「聞いてた？　あたし、は、小さい、子、嫌いなの！　だけど、だけどおつ！　努力するよ、努力してあんたを好きになるからー！　だから、来ても、良いよ。頭、痛かつたでしょ？」

ひのりはマイのもとへ走つた。倒れているマイを抱えて、抱きしめた。

ひのりが幼女を抱きしめられたのは、初めてのことだった。
マイも、頭が痛いのを我慢して抱きしめ返して言った。

「おつがとうござまゆ」

第30話 ひのつべスマイ！ 短い戦い（後書き）

ちよつとひのりの設定忘れてました(・_・)

更新遅れました。いやあ、さすがに毎日更新は無理です。でも、なるべく早く更新が夏休みの目標です。

では、また次のお話で。

第31話 セトの魔法

第1グループ

「ん……これと書いていい呪文はないんですね。というか、思いつかないんです」

『良いじゃないですか、タベタイナのやつだ。食べたい気持ちでいっぱいじゃないですか！』

「嫌です！ そんな変なダサイ呪文」

「変」「ダサイ」その言葉一つ一つがリーフにピザとなり、突き刺される。

結局4人は立ち止まって、呪文を考えることになった。

セトとリーフは特に呪文のことで悩んでいた。リーフはそのままでいいと呟つが、セトはどうしても気にいらなかつた。このまま気にいらなかつたら、先にも進めない。

『なるべく早くしてくださいよ、暑くてたまらないのです』
「リーチャんも考えてくださいよ。七五調じやないとダメですか？」

『そんなことはありません。何でも良いですよ』

それだけ言つと、ノアと訓練のようなものを始めてしまつた。

「私も手伝おうか？」

「はい！ お願いしますう！」

ルナはセトの近くへ行き、座り込んで呪文を考えた。全くアイデ

イアが浮かばない。

「……少しごらい」

「……ん？」

「少しごらい長くたつていいんじゃないかな？」 だが、そんなに長く

考える時間はない。急ごつ

(急がないんですよ、それが)

セトは頭を最高速度で回転させるのだが、ルナはどこか遠くを見つめているようだった。

「私は天に選ばれしもの。世界に光を、我に波動を」
呪文のように呴くルナ。その声が、あまりにも小さすぎて。セトに聞こえているかどうか分からぬ。セトはまだ腕を組んで考えているようだから、聞こえていないのだろう。

「聞こえてたか？ 今言つてやつたんだけど？」

「えつ……『めんなさい、聞いてなかつたです』

「はあー……私は天に選ばれしもの。世界に光を、我に波動を。これでいいか？」

「うわ……すごい傑作！ 採用採用」

セトは急ににこやかになり、大きく手を叩いた。ルナは呆れた目でセトを見る。

まあ、とにかく。これでセトの呪文は決まった。やつと先に進める。ここまで私たちを待たせたんだから、早速セトの腕前を見せてもらいたいものだ、とルナは思う。

「じゃ、練習しよう！ って言つても、どうやって？」

「早く、次の目的地に行かないか？ 練習にもなる」

「あ、そうだつたね！ 『めんなさい』

そういうながら固まつた溶岩をたこにあげるセト。ルナも雲を出し、乗る準備をした。

「リーフ、ノア！ そろそろ行くぞ」

『はい、分かりました！』

ノアとリーフは戦闘を止め、一人の肩に乗つた。あとはセトの準備が出来るだけ。そう、誰もが考えていた。そのときだった。

「なあ、上」

『はあ？ 上？ つて……！』

『『ゴウー？』』

4人が上を見れば、それは偉そうに腕を組み、まっさかさまに降りてくるゴゴウの姿があった。何故か笑っているようだ。ただ余裕をこいでいるのか、ただのバカなのか……。

「ははははは！ リーフ、ノア！ また来てやつたぞ！」
着地はふわりと決めたゴゴウだった。

が。

「つ―――――？」

言葉にならない悲鳴をあげながら、さりにさりに下へ落ちていくなぜだか分かるだろうか。

まさかとは思うが、そこに落とし穴が仕掛けられていたのだ。聖界に異変が起きる前、子供たちがいたずら半分に仕掛けたのだろう。子供がほるにしては、かなりの深さであった。

「バイバーイ、ゴゴウ」

「助けるー！」

ゴゴウの声がだんだん遠くなる。それをセトたちはこんまりとみつめていた。

第31話 セの魔法（後書き）

遅くなつてすみません！

長期連載停止になつてしまい、あせりました。

なので、変な文になつてしましました。（まるでいいわけですね・・・

・（^_^・・）

とにかく、次も遅くなるかもしれないので、期待しないで待っていてくださいるとあります。

第32話 赤面（前書き）

現代グループのあらすじ

地震は震度3にまでおさまり、安心していた二人。外では黒い月があることにアクアが気づく。アクアは自分がもうすぐ消えることを話し、アオイは希望を持てという。アクアはアオイを抱きしめようと抱える。しかし、実体の無い彼女は触れられない。

アクアは月に願つた。自分の体が欲しいと。

現代

外の景色はお世辞にも美しいとはいえた。聖界でおきていた異変がこちらにも影響しているようだつた。綺麗に並んでいた田舎の田んぼ道。ところどころにある住宅街。全てが結界に包まれたかのようにバイオレットに染まっていた。

「数時間でこの結果なのさね。行く？ アクア」

『……もちろん、行くだろ？ 平和に過ごしたいし』

窓の端っこのはうに、ここから見るとよく分からないうが、今まで言う巨大なんだん』虫が暴れてこるように思えた。いや、実際そうだ。

「アクアらしいのさ」

アオイはのりおを振り起しあつとしている。アクアは小さく、声も立てずに笑つた。

「んー……アオイ？ どした」

意外にも寝起きの機嫌はいいものだつた。アオイはのりおの手をぐいぐい引っ張つて、笑つた。のりおは何がなんだかわからなかつた。

「ちょっと出かけてくるから、みんなをお願い。あと、通信機がなつたら出ておいて。よろしくなのさね」

「……ん」

アオイはのりおに手を振つて、遠くの青い空に飛び出そつとした。アクアもそれを追おうとした。しかし、何かに気がついたアクアはアオイの服を引っ張つて止めた。

『まずいいたいことは2つ。1つめ。着替えないの？ 2つめ。誰かが、見てる気がする』

「あーはいはい。着替えないとね。つと、それはともかく……誰か

が、見てる？

『「ゴーヴかもしれない。アオイは知らないよね。君に出来た前、聖界でボクの後をずっと追つてきた、ストーカー野郎のこと…』

アクアが叫んだ瞬間、通信機が鳴った。のりおは言われたとおり通信機に出た。

「……のりおだ」

「あ、のりおくん？ アオイちゃんかアクアちゃんに代わって？」

セトの声がした。アオイは急いで通信機をうけとった。

「もしもし。どうしたのさ？」

「実は、ゴーヴがそつちの世界に行つたらしくんです。注意してください」

「ゴーヴ……つてあの？」

「知つてるんですね。とにかく、注意を怠らないよう！」

通信機の会話が途切れた。アクアが深刻な表情になり、アオイはアクアの顔色をうかがっている。そんな時、のりおが口を開いた。

「心配すんな。アオイは俺が守つてやるから。べつ、別に特別な意味じやないからな！」

『へ～、のりおくんとアオイつてそういうカンケー？』

「ちつがあう！ 変なこといわないでよ、アクア！」

『顔、赤いけど？』

アクアはアオイの顔をわざと下から覗き込む。そうすると、ななさらアオイの顔が赤くなる。結構いい感じの雰囲気になつたとき、空から黒い物体が降つてきた。

「お前らー！ 甘つたるい会話するな！」 じつちまで顔が赤くなるわ

！」

『ゴーヴお前……』

アクアが驚いた顔でゴーヴの事を見る。そして次の瞬間、何を言

うかと思えば！

『髪のびてきたね？ なんか、前よりかっこよくなつたよ』

「な、何いってんの、アクア！？」

「」

「つー？　いきなり何を言つー！……私はかなり精神的ダメージが強いから、今日はひとまず退散だ！　覚えておけよ！」

ぐるりと後ろを向いたゴゴウはさつきとは比べ物にならないくらい赤くなっていて、もう耳まで赤に染まっていた。そして、遠くのほうへ飛び立つていった。

『あーあ、あいつ昔からああいつ言葉に弱いんだよね。よく知ってるし、分かりやすい』

「あー、そういうことか。なんだ、好きかと思ったのさ」

『ないない！　今はいいから！　それより、行こうよー！』

巨大だんご虫はまだ大暴れ。急がないとそこら辺の家が大変なことになつてしまつ。

アクアとアオイの2人は変身し、だんご虫のほうへ向かつた。

第32話 赤面（後書き）

あ～！ 早めに終わった！ こんなこといつ以来？
最近小説が早く進みます！

では、また次回！

第33話 マイケル・ourke 過去の想い（前書き）

第2グループのあらすじ

ひのりはマイが追つてきていることに気がつく。マイはついていくたいという。そこで、ついていけるだけの力があるかためす。結果は、一発でひのりの勝ち。後に、ひのりは反省し、マイに謝る。結局、マイは付いていく事になった。

短っ！！

第33話 マイケルマークー 過去の想い

第2グループ

ひのりたちはマイを引き連れ、歩いていた。大雨は止むことなく、容赦なくひのりたちをぬらし続ける。マイは、ひのりの近くでひのりのマークを引っ張つて歩いている。

ひのりは本当に子供が嫌いだった。実は、隣にいるだけで鳥肌が立ちっぱなしだった。マイはそんなことも知らずに、手を握りつとしている。

「ダメですか……？」

「まつ、まだ無理！ ごめん、マイ

「いいんですよ。少しずつ、やっていきましょう？」

マイに励まされ、ひのりも少し笑顔になつた。ちょっとした衝撃で手と手が触れ合つた瞬間、びくつと体が反応した。その敏感さに、我ながら恥ずかしいと思つてしまつた。

「来る、あいつが

「あいつ？ マーカーのこと？ マイ」

「ええ、そうです。後ろを見てください」

ひのりが振り向くと、黒いタキシード姿の男がすごいスピードで接近していた。危険を感じ、マイをロングマークの後ろに隠すひのり。

「ひのり、さん

「つうつー… 鳥肌なんか、気にするもんか！」

鳥肌よりも人の命のほうが大事に決まっている。

「おい、よく聞け。今回は、困ったことになつたな。もうすぐ神が

目覚める。生け贋が必要なんだ。誰か、生け贋にならないか？」

マークはいたって真顔で話す。マークが見つめる先は、なんとマ

イだった。マイはひのつのポートから少し顔を出し、そつと田線を含ませた。

「その娘、生け贋になる気はないか？」

「い、いいえ！」

「そいつが最適なんだがな……まあ、力死んで生け贋にしてやる」
ゴゴウは、手を持っていた、巨大な鎌をマイにむけた。そして、
にやりと笑って飛び跳ねた。マイはひのりの前に出た。

「マ、マイ？」

「私の力、甘く見ないで下さいね　ちゃんと見ててください、私
のことを」

ひのりは戸惑いながら頷き、後ろのほうに避難した。とたんにマイは真剣な表情になり、ゴゴウを睨みつけた。そして、手のひらをゴゴウにむけ、バリアを張った。

そのバリアはかなり強力で、鋭そうなゴゴウの鎌でも到底破れそうになかった。

「つ……つ、ああ！」

「やはり素晴らしい……聖界にいるときからずっと知っていたよ。
この力、私の次ぐらいに素晴らしいかな！」

「つ……知つて、たんだ」

ゴゴウをはじき返すとマイは盾を出現させ、次のゴゴウの行動を待つた。ゴゴウも負けでいなく、すぐにマイを見た。そして、恐いほどにお互いにらみ合っている。

「神つて、誰のこと？」

「すぐわかる。お前が一番よく、知っているんじゃないかな？」

「……あの人のことか」

マイが言うあいつとはなんなのか、よく分からなかつた。ただ、マイの目の色が変わつたことから、大事な人だったと考えられる。

「行くよ、相棒？」

マイは、盾に話し掛けた。すると、たちまち盾は剣にすがたをか

えた。剣の中央にある宝石は、鈍い蒼に光っていた。徐々に剣全体に光は広がっていく。

「あいつに会いたいか？ それとも、もう忘れたのか？」

「……私は、あの人のこと、忘れられなかつた。ずっと、ずっと、この時を待つてた。たとえ変わり果てた姿だとしても、会いたいの……！」

マイの瞳に、薄つすらと涙が浮かんだ。それを拭いもせず、まっすぐに自分の剣を見つめていた。

「もうすぐ目覚めるんだ……。我慢しないと、ダメですよね？」

「……勝手に、想つているがいい」

「ゴウは鎌をしまい、空高く飛んでいった。マイは、雨でビショビショになつていてもかかわらず、その場に座り込んでしまつた。ひとりは急いでマイのもとに行き、抱きかかえた。

「マイ！ 大丈夫？」

「ええ、大丈夫、です」

「そつか。気になつてたんだけど、あの人つて誰なの？」

「……私が、4歳のときでしたか。名前も知らないあの人と出会いました。家が隣だつたから、結構よく遊んでいました。よく遊んでいるうちに、好きになつていたんです。遊ぶだけで嬉しくて、毎日のように遊んでいました。

そんな時、あの人気が突然誘拐されてるのが分かりました。そのときは喧嘩していて、遊んでいなくて……。後から、ゴウという変な人がが誘拐していた事がわかりました。

5年後に目覚めるつて言われて、よく意味がわかりませんでした。ゴウによく聞いてみたら、こここの神様らしき者になつていたらしいんです。

もう死んでいるかもしれないとか、遠いところへ行つてしまつたとか、そんな話も聞かされていて、そのたびに狂つてしまい、暴れていきました。9歳になつたころ、幼かつた自分がなくなつてきて、本で調べたりして詳しく調べていました。もうすぐで、目覚めるら

しいんです。

まああつたら、名前を聞いておきたくて。次に、喧嘩したこと、謝りたい。最後に、自分の気持ちを伝えたい。だから……田覚めて欲しいんです。

皆さんに反して「めんなさい。神を復活させたら、人間界も、ここも滅びてしまうんです。皆さんは復活させたくないって思つていいんですから、私はここから抜けた方が良いですよね？」

マイは視線を下にやつて話した。ひのりは鳥肌のことも忘れて、マイの話に耳を傾けていた。

「あたしは、いいとおもうよ？　その子、連れて帰ればいいんだよ。被害を出さないように考へるから、安心してね。マイは、一途だね」ひのりは優しく笑いかけた。被害を出さない方法なんて無いに等しいが、やつてみるしかないと思つたのだろう。マイも、曇つていた表情が晴ってきた。

「それより……大丈夫なんですか？　鳥肌」

「え？　わあああああああ！」

ひのりは鳥肌のことなんて忘れていたから、ビックリしていたのだった。

第33話 マイマニアパー 過去の想い（後書き）

いつも！ 遅くなりました。
次回は遅くなると思います。パワーを使い果たした……。
ということで頑張ります。

第34話 分かり合ひJET（前書き）

第1グループのあらすじ

セトは呪文を考えていた。ルナにも協力してもらい、やつとのことで呪文が決まった。

早速試そうと、次の目的地に向かおうとするが、上空からゴーワが登場する。

ゴーワで試そうとも思ったが、ゴーワは運悪く落とし穴に落ちていった。

第34話 分かり合ひ」と

第1グループ

「お、ま、え、ら……」

「ゴーワ……しぶとこやつだな、お前」

あの短時間のうちに、あんなに深い落とし穴を登つてくるなんて、執念にしか思えない。魔法など使わず、腕と足の力で登つてきていった。

「セト、と言つたか。お前、生け贅にならんか?」

「わ、私!? というか、なんの?」

「そろそろ神、もとは人間だったのだがな。目覚めるのだ。生け贅にならんと、力尽くで……」

ゴーワが鎌を構え、セトは一歩後ずさりをする。

「私は天に選ばれしもの。世界に光を、我に波動を」
小さく咳き、セトは杖を持つた。その様子を察知したのか、ゴーワはにんまりと笑つた。ゴーワの鎌が変形する。マイと戦つた形とはまた違うのだ。余計に鋭くなっている。

「どうか、あの呪文、杖のへんしんように使っても良いですか? ルナちゃん」

「ああ、構わないが?」

「私は、生け贅にはなりません」

ゴーワがセトに突進してきた。セトがうまく魔法をコントロールできるのか、それが3人には心配なのであった。セトは、4人の中で1番魔法のコントロールが出来ていない。

「つ、ゴ、ゴ……」

「生け贅になりたくないんだろ? なら、かかってこい。弱いのならば、生け贅にでもなればいい。さつきも一戦終えてきた。あの

結構強い娘の好きなやつが神らしい」

「……その子、ひのりちゃんが言つてた子かな」

今の状況は、セトが圧倒的に負けている。ゴゴウが飛び、セトが片ひざをついてゴゴウを跳ね返す体制になつている。ゴゴウの目は、本気だ。

「つ、お前が生け贅になれば良い」

「いいや？ 私は生け贅にならない。神に仕えるべき存在だからな？」

「生け贅にならぬために……私が、神に仕えてやります。そして、あなたが生け贅になればいい話。決定じゃないの？」

セトはしつかりとゴゴウを跳ね返す。パワーだけが自慢なもので、たとえ男だろうが大人だろうが、関係無し、手加減無しで向かっていく。

「お前では無理な話だろ？ な。神に仕えるのは、ふさわしい者だけだからな」

「別になりたくなんか、ない。私は普通に暮らしてみたい。みんなと喋つて、みんなと笑つて。それだけで良いのに……。やっぱ神なんかに、仕えたくない」

セトは歯を噛み締め、ゴゴウをにらみつけた。一鳥ついでゴゴウに突進するセト。ゴゴウは余裕の顔でバリアを張る。大きな波動を杖から放ち、その波動は、バリアを破るほどの勢いだった。しかし、ゴゴウのバリアは破れることはなかつた。

「お前の望む、普通とはなんだ」

「え……」

こきなりの問いに、構えていた杖をおろすセト。呆然と立ち去るし、ゴゴウの瞳を見る。

「私の望む、普通？」

「そうだ。……私も元は普通に、平凡に過ごしていた。しかし、実

の親を目の前でハツ裂きにされたとき。そのときから私は普通に過ごせなくなつた。終わり無き、神に仕える生活を強いられた。……
私だって普通に生活したい

「ゴウの過去。それはとても悲しく、恐ろしいものだつた。セトは、それが自分だつたら……と想像し、とても耐えられないと思つた。ゴゴウはそれに耐え、今にいる。その努力をした者を生け贋にすると言つたセトは、ひどく後悔した。

「じめんなさい……。私、何にも知らなくて」

「……いいんだ。これで、私たちは分かり合えただろう? さあ、來い。お前の全てをぶつける!」

「分かりました。しつかりと相手が分かるように!」

セトはもう一度波動を放つ。先ほどより、一段と強力な。

「つぐ……まだだ、セト!」

「らあああああ!」

10秒ほど波動を放ち、杖をおろすセト。一回も一度の戦闘で強力な波動を放つと、さすがに疲れる。そこでセトはいつたん攻撃を止め、真っ向から勝負に出ることにした。体勢を整え、ゴウに向かつて全力疾走をする。

セトの手は硬いサポーターで覆われていて、どんなに強いものを本気で殴ろうとも割れることは無いようになつていて（とても傷ついた場合、ひび割れる場合はある）。ゴウはまたしても強力なバリアを張り、セトの攻撃を受け止めるつもりだ。

セトのパンチと、ゴウのバリア。二つの強力な魔法がぶつかり合い、周りに大きな衝撃をあたえた。辺りは眩しい光に包まれる。ルナたちは何歩か後ずさり、光に包まれなくてすんだ。

「セトッ!!」

ルナの叫びは一人の魔法による衝撃音で搔き消されてしまった。

どのくらいの時間光が発生し、一人はあのままだつたのだろう。あの光はまるで、現れなかつたかのように全て消えていた。むしろ、あの光はなんだつたのだろう。

『セトちゃん！！ 大丈夫ですか！？』

セトは立つっていた。倒れている「ゴウ」を、悲しそうな目で見つめながら。

「そうだよね……私たち、分かり合えたんだよね……」

セトは震える声で「ゴウ」に語りかけた。目をゆっくりと閉じると、涙が頬を伝い落ちる。手を畠に当て、座り込んで、声を殺して泣いた。

第3・4話 分かり合ひJET（後書き）

いつも、遅くなつました！

ここでは皆さんにお知らせです！

来年の春、私が中学1年生になつたら、新たな連載小説を投稿したいと思っています。内容はもう、ずっと前から考えていて、最近ストーリー的にまとまつてきました。

この連載が完結するころ、もしくはその前に連載が始まると思います。

では、よろしくお願ひします！

第35話 だんご虫（前編）

現代グループのあらすじ

ゴーワは人間界にきた。アオイとのりおの甘つたるい会話を聞いて、赤面し姿をあらわす。そこで戦闘にはいるとアオイは身構えるのだが、アクアはゴーワを言葉だけで追いかける。そして、巨大だんご虫へとむかつた。

第35話 だんご虫

現代

「うわー、触手付きだよ」

『気持ち悪い……とにかく本体を狙おつ』

アオイは『』を、アクアは斧を構えた。

アオイの『』は、先が鋭くとがっている。黒で統一されていて、暗いところで戦闘するときにも目立たないようになっていた。

『まず、僕の言葉に従つて？ セーのの合図で触手のほうに切りかかる。君の『』は、矢が無くても使えるように鋭くなつて切れるよね？』

「うん。じゃ、行こうか」

二人は田を合わせ、頷いた。同時に口を開くと、小声で囁いた。

「『セーの』」

そのかけ声と同時に一人は走り出した。アオイは右側、アクアは左側へ。それぞれの武器をかまえ、触手に切りかかった。アクアのほうはうまくいき、一本切り落とすことができたが、アオイはそう簡単にうまくいかなかつた。

「いつ、やあ！ 『』、が……」

触手に巻きつかれたアオイは、その勢いで『』を落としてしまった。必死に足搔こうと足をばたつかせたり、両手で触手を殴りつけたりしていた。少女一人の力では触手は簡単に離れない。そんなことも気がつかず、アクアは次々に触手を切り付けている。

「ちょ、止め……！ やだ、やめて……アクアア！」

アオイに巻きついた触手は、巨大だんご虫の口付近に運ばれた。アオイの大きな声に、さすがにアクアも気がついた。アクアは反対側にいるアオイの様子を見に行くことにした。が、誰もいない。

『アオイ！？ 何処にいるの！？』

「上だよ上ー！たつ、食べられそうなんだあ！助けて！」

アクアが上を見上げると、触手に捕まりもがいているアオイの姿があつた。アクアは斧をかまえた。そう、今からこれを触手に投げるところなのだ。

「えっ！な、何してんの？」

『これで、触手を切り落とす！待つてね、今助けるよ』

「む、無茶だああ！」

そう叫んだときにはもう遅かった。斧がアオイめがけて、すごい勢いで飛んでくる。アオイはもう失神しそうだ。

斧はアオイの髪を少しかすり、通り過ぎていった。触手自体に全く被害は無かつたが、その向こうのだんご虫に直撃した。だんご虫はあまり気にしていないようだ。

「あ、あれ？」

『ごめーん！もう一回やつていい？』

「やめてよ！髪かすったよ」

アオイはもう半分泣いている。斧が高速で迫つてくるのは、相当の恐怖だつただろう。それを、もう一度体験する、しかも一発外れているのにもかかわらず。

『信じて、大丈夫。ボクはアクアを殺しはしないよ』

「いや、十分殺しそう」

『まあ、大丈夫だよ。おーい、相棒』

アクアは大声で斧を呼んだ。すると斧は、さつき通つたところをしつかり通つて帰つてきた。もちろん、アオイの髪をかすつて。

「……かすつたんですけど」

『い、今のはボクじやない！相棒が悪いんだ！』

アクアは首を大きく横に振り、斧を指差した。当たり前だが、斧の反応はない。

『じゃ、今度は成功させる』

アオイはじつと目を瞑り、成功を祈つた。

風を切るような音がして目をあけると、斧は触手に突き刺さっていた。触手からは、緑の液体がとめどなく吹き出している。触手が暴れるたびに、裂け目はどんどん広がっていく。

触手の力はすぐに弱くなり、アオイは無事に抜け出せることができた。だんご虫の体につかまつてアクアの投げた斧を呼び寄せ、それに乗つてアクアの元へ帰つた。

『もう、アオイのばか！ 心配、したよ？』

「ごめん！ もう、心配かけない。役にたつから！」

一人はすぐに視線を巨大だんご虫に戻した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9960c/>

楽園～私の居場所～

2010年10月13日21時33分発行